
たとえ、世界を滅ぼしても ~ 第4次聖杯戦争物語 ~

壱原紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たとえ、世界を滅ぼしても ～第4次聖杯戦争物語～

【Nコード】

N6086Z

【作者名】

杏原紅

【あらすじ】

初恋の女性とその娘達の幸せの為、そして自分とは違う男への憎悪を胸に間桐雁夜はサーヴァントの召喚へ挑んだ。さりとして、その根底にある祈りはただ一つ

「自分はどうなってもいい、でもあの子《桜》だけはこの地獄から救い上げたい」

そして現れたのは……

これは、あまりにも魔術師にはふさわしくなかった「人間らしい」
マスターと、
心を狂わせ贖罪の機会を望み狂い続ける、「哀れな」狂戦士に堕ち
た騎士と、

1つの世界を滅ぼして1つの世界を救った、「愚かな」英雄の物語。

英霊召喚（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。ご了承ください。

それでも見てやろう！という心優しい方は、どうぞ閲覧してくださいませ。

英霊召喚

「!!!!!!!!!!」

その時の事を、彼は今でも覚えていた。

「消えろ、貴様の存在はあまりにも赦しがたい……!!」

自らと救いたいと願った少女を、あの地獄から助けてくれた2人の騎士を

対になるような、黒き騎士と白き騎士の姿を

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。繰り返すつどに五度、ただ満たされる時を破却する。」

暗く冷たい地下のそこで、その詠唱は行われていた。

言葉を紡いでいるのは一人の男、その彼の後ろの方には一人の翁が立っている。

「告げる。汝の身は我が下に、わが命運は汝の剣に。」

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。」

願いが、ある。

どうしても、叶えたい願いがある。

この身をかけてでも、助けたい、少女がいるのだ。

(その為になら、俺は・・・！)

相当の激痛が体に走っているのだから、彼は詠唱を止めない。

片目からは血涙が流れ、仮面のように固まった頬の下で虫が騒ぐ。

それでも・・・雁夜は言葉を紡ぎ続ける。

「されど汝はその目を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖をたぐる者。」

(あの子を、桜ちゃんを！)

分かっている、分かっていた。

この言葉を紡いだ時点で、自分の命は『絶対』に助かる事はなくなっただと。

あの爺が、自分の助けになるような事を助言する等、ある筈がないと。

「汝三大の言霊を纏う七天！」

分かっている、自分は

(狂っていても構わない！俺を食い殺しても構わない！だからあの子を！)

桜、自分が好意を寄せていた女性の娘。

まだ幼い少女が、自分がこの呪われた間桐家から逃げ出したばかりに、あの子が犠牲になってしまった。

非力な幼い少女がこの耐え難い現実に対抗するには、その心を殺してしまうしかなかった。

かつて自分に見せてくれた、記憶に残る彼女の姿はもはやない。

もし、自分が桜を助ける事が出来ても、その心が元通りになる事はきっと無いだろう。

犠牲になったものは多く、この少女が背負うにはあまりにも味方がいない。

家族の元に帰せても、再び元の笑顔を取り戻せるとは限らない。

そして、その隣に自分が存在し、守り、慈しみ、共に生きるのはこの体では叶えられない。

どれだけ間桐雁夜が手を尽くしても、このままでは、桜は永遠に救われないのだ。

それでも…俺は…

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

(桜ちゃんを、助けたいんだ！)

眩い光が暗い地下を照らし出す。

視界が光に包まれるのを見て、雁夜はその場に膝をついた。

魔力を根こそぎ奪われ、それでも必死に自分が呼び出したであろうサーヴァントの姿を求めぬ。

そうして、雁夜は驚きに目を見開いた。

「二人」、いる。

黒いフルプレートを纏った黒い騎士、呼び出そうとした狂戦士バーサーカーにふさわしい騎士。

だがもう一人、その隣に立っているのは……

「問おう、貴方が『我ら』を招きしマスターか？」

肩ぐらいまでの白銀の髪、明らかに理性を宿した蒼色の瞳、そして静かに響き渡る澄んだ声。

雁夜より少し背の高い程度の、中性的な顔立ちをした青年がそこに立っていたのであった。

英霊召喚（後書き）

多くの小説家さん達に魅了され、初心者ながらビクビク投稿いたしました！

不定期更新となりますでしょうが、あきれず見守っていただければ嬉しいです。

これから頑張って更新していきます！

脳内会議（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。ご了承ください。

それでも見てやろう！という心優しい方は、どうぞ閲覧してくださいませ。

脳内会議

聞き取れない声、湧き上がる黒い魔力、はっきりと直視出来ない歪みを漂わす黒き騎士がいた。兜を被って見えないその瞳、けれど確かに狂える意思を感じざるをえない、赤い光が見えた。

「問おつ、貴方が『我ら』を招きしマスターか？」

そうしてそれに続くように、静かな声が響き渡る、その声は余りにも静かで、そしてそれを紡いだ白銀の剣士の表情は逆に……とても、穏やかだった。

なのに何故だろうか、その穏やかさが逆に、とても

「どつしたのです？何故返事をしてくれないのですか？」

思わず、息をのんで彼らを見つめていると、不思議そうな声が響いた。
困ったような表情に、雁夜は魔力切れでうまく動かない体を動かし、銀色の騎士に答える。

「ああ・・・そうだ、俺がお前達のマスターだ・・・っ！げほっ！
ごほっ！」

何とか声を出して、そして同時に咳き込んでしまう。
まともに立っていることも出来ず、雁夜は思わずその場に倒れこんでしまった。

やはり、なんのイレギュラーか知らないが、
二体のサーヴァントを呼んでしまった為か、体にかかる負担は予想以上に大きかったようだ。

（くそっ・・・サーヴァントや爺の目の前でこんな醜態を晒してしまうなんて・・・しかも、一方は狂化してないとかどうなってるんだ！？）

だがこうして召喚出来た以上、彼らは自分のサーヴァント。
それに、しっかりと話が出来るのなら、もしかしたら桜を助けるのに一番の障害となるであろう
間桐臓硯を倒すのを手伝ってくれるかもしれない。

何とかそこまで考えて、起き上がろうとした、その時

『・・・どういうことです、マスター・・・その身に何を飼っている？いや、寄生されているのか・・・その理由、説明して頂けますか？』

頭の中に、直接語りかける声が響いた。

「な・・・」

啞然としてしまう、今、目の前のサーヴァントは何と言ったのか？

「大丈夫ですか？マスター・・・貴方は我らを呼び出したのです、余り無理はなさらず。」

『ダメですよマスター、下手に声に出してはその蟲翁に気付かれてしまいます。出来ればこのパスでの会話は長引かせる訳にはいかないのです。』

穏やかな笑顔のまま静かに白銀の騎士が俺に触れ、そのまま抱き起してくれる。

だがそれ以上に頭の中に響く声が、それを告げていた。

「どうやら、貴方はこの召喚で魔力の消費が激しいようですね・・・休む部屋はございますか？お連れいたしますのでどうか我らに指示

を。」

『あの蟲翁は明らかにまともでは無い、それに貴方からのパスは虫アレに対しての嫌悪感を告げている・・・虫アレは貴方の敵ですね？そうならば頷いてください。』

コイツは、このサーヴァントは気付いているというのか。

あの爺が人間でもなければ、まともな魔術師ですらない化け物だという事に・・・！

呆然としてしまいそうになりながらも、思わず頷いていた。

敵かと問う声に、それは事実だと告げる為に。

「そうですか、ならばお連れいたします。」

「待て。」

だが、穏やかな笑みを深めてそのサーヴァントが頷いたと同時に、背後からしわがれた声が出た。

「・・・なんだよ、爺・・・召喚は無事すんだ、部屋に戻ってもいいだろう・・・」

（っ、今の今まで黙っていたにも関わらず、何故今話しかけてくるんだ・・・っ！）

ギリッ、と歯を喰いしぼり精一杯睨みつけるが、声をかけた臓硯は

楽しそうに言葉を続けてくる。
お前の苦しむ顔こそが、楽しくて嬉しくて堪らないのだと言わんばかりに。

「何、よもや貴様が英霊を二体も召喚する等思っておらんかったからう……久しぶりに、表に出てみたくなつたわけじゃよ。」

「なっ……まさか!？」

そのまま続けて言われた言葉に愕然とする。

そんなと考えたくない可能性に絶望してしまいそうになる。

「察しが良いようで助かるわ、儂にそちらのサーヴァントを寄越せ雁夜……分かっておろう、貴様の魔力では二体のサーヴァントを維持する事は、不可能だと。」

「っ、それ……は……」

答えられるわけがない、事実その通りだからだ。

呼び出しただけで生きているのが奇跡に近い、実際今もこの銀の騎士に支えられている自分が二人分の魔力供給に耐えられる筈がないのだ。

「ふん、ならばさっさと儂にその貴様を支えている方のサーヴァントを渡すがいい、貴様は元よりバーサーカーのマスターになるつもりだったのであるうが……イレギュラーになるであろうサーヴァントを貴様が従える事は出来るまい。」

「……！」

(どうすればいい、どうすれば……！)

臓硯は理性のあるこのサーヴァントを自分から引き離す事で、万が一にでも己に反抗する可能性を潰そうとしているのだ。

そんな事を認めれば、恐らく先程感じた一寸の希望すらも確実に消えてしまうだろう。

だが、今此処でそれを拒絶すれば体の中の蟲がこの身を食らいつくすかもしれない。

(今すぐにも、桜ちゃんを助けられるかもしれないのに……！)

悔しくて堪らなかった、こんな時にこのまま要求を呑むしかないと理解してしまうのが。

そうしなければならぬのだと、嫌でも感じてしまうのが。

どうして自分はこんなにも

だがどうしようもない、この味方になってくれそうだったサーヴァントを裏切ってしまうしかないのだと雁夜はそう判断しようとした。
……が

「マスターすいません、ちょっと眠っててください・・・今から、その人外をぶち殺しますので。」
「えっ？」

頭上から降ってきた穏やかな声に意識が止まる。

同時に首に軽い衝撃を感じて、雁夜はそのまま倒れ伏す。

だが、何故かその時、自分の右手の指に何かが詰められたような・・・
・そんな感覚を最後に雁夜の意識は完全に闇へ沈んでいったのだっ
た。

脳内会議（後書き）

突然の謎のサーヴァントのパスを通しての会話、戸惑い困る雁夜おじさん、空気になりかけているバーサーカー、KYな蟲翁・・・色々突っ込みどころ満載の話です・・・っ！駄文、申し訳ございませんでしたm（――）m

次回「悪鬼討伐」、頑張って更新します！

気が向いたら見ていただけると嬉しいです・・・！

悪鬼討伐（未遂編）（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。ご了承ください。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

悪鬼討伐（未遂編）

気を失わせたマスターを肩に担ぎあげながら、騎士は目の前の翁を少し見て・・・結論を出した。

（・・・ああ、殺せないな、この蟲爺は個体じゃなくて集団だから、真つ当な魔術師や英霊では無理だ。）

正直なところ、【彼】は気付いていた。

『今の』自分とこの状況では、目の前の「蟲の姿をした魔術師」は殺せないだろう、と

外道には外道をぶつけない限り、大した致命傷すら与えるのは困難である、と

（だから、とりあえずマスターには「保険」をつけたが・・・まったく、生前からもそうだが、面倒な相手ばかり敵に回るな。

しかし・・・殺す、と断言していた手前、やっぱり出来ませんでした！と言うのも問題があるな、マスターとの関係に溝を作ってしまった。

さて、どうしたものか。）

内心そう呟くと、彼はまいったなと溜息を吐いた。

「っかかか！無駄じゃ無駄じゃ！儂を殺す？たかがサーヴァント風情がそんなこと出来る筈がなかるうて！」

蟲は笑っている。

愚かな事を口にしてしていると理解した上で、こっちは何も出来ない判断しているのだから。

それは当然だろう、こちらの方はマスターの命がかかっているのだから、今すぐにあの蟲を殺せる訳が無い。

ただし・・・それはこちらが、【マスターの意思を顧みるなら】、という条件が付くのだが。

「ああ、そうだ、我らに『貴様という魔術師を殺す術』等無いとも。」

「・・・何？」

「我らのマスターの中にいる虫は貴様の使い魔だろうか？そんなものが内にいると分かっているのに易々と手等出せる訳が無い。

マスターを内側から潰されて、この身を形成している魔力が『数分』で尽きて我らが消滅するのが目に見える。」

「ほう、気付くか、ならば分かるであろう・・・所詮雁夜如きが呼び出した、バーサーカーのオマケで出てきたバグ風情が儂に刃向う事が無駄なのじゃからな。」

「バグにオマケか・・・まあオマケだろう、実際そのせいで私のステータスは随分下がってしまっているしな。」

「・・・」

あっさりと銀の騎士が肯定し、すらすらと会話を続けてくる事に、思わず臆視は笑うのを止めた。

この明らかに穏やかな表情をしている騎士が、何故か・・・【異常なモノ】に思えたのだ。

笑っている、笑っているのに……【笑って】いない。

「……なんじゃ、貴様は」

「……それを聞くのか？今貴様が言っただろくに……『バーサーカーのおまけで出てきたバグサーヴァント』だと。」

「良いのかの？軽々しく口にしておるが、僕は貴様の言うように今すぐにでも雁夜を殺せるのじゃぞ。」

「ああ、それも承知の上だ……だがな、もしそれをすれば、貴様はとんでもない失態を犯したと後悔する事になる。」

「……ほう」

「そう、例えば」

すっ、と目を伏せて数秒、軽く考える素振りを見せると、銀の騎士は小さく笑って言った。

「我が宝具を開放し、【貴様以外のこの屋敷の人間を一人残らず皆殺し】にする。」

別に構わないだろう？貴様には【直接】の被害は無いのだから。」
「ぬうっ……！？」

ざっ、と血の気が引くように……もつとも、この翁に血が通っていればだが、明らかに翁は動揺した。

それに畳み掛けるように、騎士は淡々と言葉を続ける。

「それと……そうだな、私の魔力が尽きるまで、この屋敷で大暴

れさせてもらおうか？

丁度そこに、良い殺し合いをしてくれる相手バーサーカーがいるしな。

ああ、そんな事したら聖杯戦争の他の参加者がゾロゾロやって来るかもしれない。

もしかしたら・・・この家の事を探ろうとして、うっかり他のマスターが踏み込んでくるかもしれないな。」

「き、貴様・・・！」

「何故怒る？我らのマスターを【害したら】の話だ、もっとも・・・そうなれば、この【蟲の集積所】がどうなるかは知らないがな。」

静かに、穏やかな声で、まるで今日の天気を語るかのような気安さで、そのサーヴァントはこう告げていた。

【私のマスターに軽々しく害をなせば、お前の言う『魔術師の跡継ぎ』と『潜んでいられる安全な場所』が無くなるぞ】、と

それは、立派な脅迫だった、まともな人間なら思わず怒鳴り散らしてしまいたくなる程に分かりやすく。

自分の方が立場が悪い筈なのに、明らかに逆らうなと言わんばかりの傲慢さが見える程に。

目の前の、騎士の姿をしたサーヴァントは、本気で間桐臓硯を脅しにかかっていた。

実際、この英霊が言っている事を本気で実行されれば、その損害は

計り知れないものになる。

今まで誤魔化してきたが、娘を養子に差し出した遠坂の小倅や、此度の聖杯戦争に参加しているアインツベルンや時計塔の魔術師が、突然崩壊するだろう間桐家の跡地に偵察に来ない等、あり得ない話だ。

臓硯は生き延びれるだろう、その使い魔たる蟲を、町に放ち一匹でも生き長らえれば、なんとかなるかもしれない。

しかし・・・万が一にでも、今の今まで土地の管理人たる「遠坂家」の足元で、「人喰い」を行っていたのだと気付かれれば？

間桐臓硯の『延命』の手段に興味や不信を持たれ、時計塔が、魔術協会が、そして代行者が動くものなら、どうなるだろうか？

そして、臓硯が死んでいないと、何かの拍子で気付かれでもすれば・・・その結末は火を見るより明らかだ。

だからこそ、このサーヴァントは、【雁夜を害するな】という条件を事前に付けてきており、この臓硯の掌から雁夜ごと逃れようとしているのだ。

お前がこちらに手を出さなければ、こちらもお前の困る事はしないでおく・・・と。

マスターが「敵」と断じた臓硯の姿を見て、殺せないと理解したと同時に『脅迫』を選んだサーヴァント。

日の下を堂々と歩けないだろう、地下の蟲蔵よりも腐臭のする体に、

【彼】は臓硯が真つ当な存在ではないと気付いた。

後ろめたい事を続け、罪悪感を感じていない者には正攻法等「無意味」、同じ外道として対面する方が良いと【理解している】が故の

行動だった。

だが、臙硯とてただの魔術師ではない。

聖杯戦争の始まりを作り上げた、マキリの当主にして600年の時を生き続ける、大魔術師^{怪物}、なのだ。

この程度の脅しなど、幾らでも返答しようがあるのを理解している。

(この、目の前の『英霊如き』、早々に黙らせこの掌で踊らせてくれるわ……！)

そう考え、臙硯はあえて顎に手を添え、理解出来ぬと頭を振り。

その『事実』を教えた。

「……分かっておるのだろうか？ 貴様の言っておる事は、貴様のマスターの意思に反しておるのじゃぞ。」

「ふむ、それはどういう意味だろうか？」

「雁夜の願いは跡継ぎとして連れてきた娘を、桜を遠坂家に帰してやる事じゃ……この屋敷を破壊し、アレに手を出せば貴様のマスターが黙っておらんぞ！」

「……」

その言葉に、銀の騎士は穏やかな表情から驚きに目を見開く。心底驚いた、と言わんばかりの表情に、臙硯はニヤリと笑う。

(やはり、所詮はたかがサーヴァントじゃな……この程度の事実で戸惑うか)

その様子に、間桐臓硯は余裕を取り戻し

「ああ……それで？マスターの命を守る事と、その娘の安否に【一体何の関係がある】と？」
「な……っ？」

だからなんだと、心底どうでもよさそうに、下らない妄言を聞いたと言わんばかりに嘆息した騎士の言葉に、絶句した。

そして、理解する。
理解して、しまった。

この目の前のサーヴァントは、確かに『狂って』いるのだと。

これが、英雄だと？

そんな馬鹿な話があるか、これは……悪霊か何かの間違いだと。

その笑顔に騙された、その口調と声色に騙された、その穏やかさに騙された！

笑って等いない、慈しんで等いない、己のマスター以外の全てが、このサーヴァントには『どうでもいい』のだ！

このサーヴァントは、決して、真つ当な『英雄』ではない！
少なくとも、己のマスターが血反吐を吐きながら救いたいと嘆く命を、『くだらない』と言い切る『悪霊』だ！

「私はそもそもその娘を知らない、マスターから直接頼まれた訳でもないのに、何故マスターを害す存在である貴様の言葉を鵜呑みに出来る？」

その発言が嘘ではないという証拠は何処だ？なあ翁よ・・・何か勘違いしているようだから言っておこう。

・・・私は、【このマスター間桐雁夜に呼ばれ、彼が気に入ったから守る、ただ、それだけのサーヴァントでしかないんだよ。」

故に、臓硯はその言葉を受け入れるしかない。

あのサーヴァントに、今人質として通用するのは雁夜だけなのだ、雁夜が桜の事をこのサーヴァントに命令しない限り。

このサーヴァントは、桜が【雁夜の障害になる】と判断したと同時に、その命を奪うだろう。

そう言うと、【彼】は踵を返して地下から出て行こうと歩いていく・・・こんな言葉を、残しながら。

「案ずるがいい、この魔術師の家の長よ。」

我らのマスターが勝利を望むならば、我らは【己の願い】の為に
も協力は惜しまない。

貴様には聖杯が必ずや齎される……どのような願いを持ち、ど
のような祈りを捧げるかは知らぬが……」

背後から、凄まじい憎悪の視線を投げつけてくるマリキ・ソルケン間桐臓硯の視線を
浴びながら。

「我らのマスターに【余計な真似】だけはするなよ？」

そして、聖杯を手にした時、マスターとの【約束】を守ってくれ
さえすればいい。

それさえ守ってくれるのならば その手に、聖杯を届
けよう。」

「……いいじゃろう、精々口先だけにならぬようにするがいいわ。
……だがその前に答えよ！貴様は、何のクラスで招かれた！！」

ぶつけられた罵声に近い問い掛けに、出口に向かう階段を上がりな
がら、【彼】は振り返る。

その表情は

「この身は聖杯に招かれし、第八のサーヴァント・【ドラグーン】
龍殺し」

└

吐き気がする程、穏やかで綺麗な笑顔だった。

悪鬼討伐（未遂編）（後書き）

はい、そういうわけで、表だって臆視は雁夜おじさんを痛めつける事は出来なくなりました！

・・・うん、此処まで黒くなるとは思わなかったのですが、このオリジナルサーヴァントさん、しっかりとバーサーカーを呼び出す呪文の影響を・・・受けているわけではありません（！？）

【彼】は本当に主人である「間桐雁夜」しか優先していません。その命さえ守られれば構わない、誰も彼も助けようと頑張る「正義の味方」ではないのです。

次話は、目を覚ました雁夜おじさんと二人のサーヴァントの自己紹介編（？）。更に次話で、雁夜おじさんの負担を『微妙』に減らしてくれるアイテムの紹介編です。

それでは、此処までの閲覧、どうもありがとうございました。

夢幻湖畔（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。ご了承ください。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

お気に入りに登録してくだってる方がいらっしやる・・・！
嬉しくて泣いてしまいそうです！本当にありがとうございます！
これからも頑張って書いていきますよっ！

夢幻湖畔

よもや、呼び出されてこんなに不愉快な気分になるとは思ってもみなかった。

「じほっ！げほ・・・っ！」

己が問いに答えると同時に、ビシャビシャと蟲交じりの吐血を繰り返しながら、その場に蹲る哀れな己がマスターの姿に。

その姿を後ろから面白いものを見ていと言わんばかりに、こちらを品定めするように見ながら、ほくそ笑んでいる翁むしの姿に。

そして、恐らくだが目の前の「自分のマスター」が苦しんでいるにも関わらず、自らの隣でただ狂いながら指示を待ち見ているだけの黒い騎士に。

だから【彼】は笑ってた、それはもう穏やかであろう笑みを、心の底から浮かべていただろう。

翁むしはそれに気付いていないが、当然だろう、そんなへマをするほど単純な思考も行動もしてないのだ。

それに生前はそんな聖人みたいな人間じゃなかったし、そもそも自分がお綺麗な騎士様だと勘違いしてくれるに越した事はないのだから。

だが、繋がっている魔力供給のパスのおかげであろうか？

何となく自分のマスターは己の笑顔に違和感を感じていたようだ。

正直これは喜ばしい、上っ面の笑顔に騙されるような馬鹿なマスターでは困るのだ。

ついでに流れ込んでくる魔力も喜ばしい、細い細い頼りないラインだというのに、その魔力は清流のようにとても綺麗だった。恐ろしい外見にも関わらず、その魂の質を感じさせる魔力・・・成程、己のマスターは限りなく【善】よりの人間なのだろう。

なのに、その中に黒い滲みのような負の感情がある。そう・・・それを、自分はよく知っている。

これは【憎悪】だ。

それも、力さえあれば人を一人呪い殺せる程の。

(・・・ああ、このマスターは本当に『人間らしい』、死なすのはもつたない、マスターは【とても好ましい人間】だ。)

だから、『まだ』落ち着いていられた。

どれだけ周りが気に食わない状況でも、冷静だった。

自分の勝手な行動で、マスターが死ぬような状況になっでは困るのだ。

故に問いかけた、口には出さず心で、翁むしに聞かれないように。

『何故か』魔力供給ラインが混線している為、自分ともパスが繋がっている狂戦士にも聞こえるように会話を続けていた。

（うん、このマスター『だけ』は何よりも優先しておこう。
このマスターはきつと、『自分の大事な者だけは捨てられない』ど
こか甘くて抜けてる人間だから。）

そんな、独善的で自分勝手に、一方的な事を考えながら

穏やかな笑顔のままだった、穏やかな声色のままだった、まさに人
好きされるような笑顔だった。

だがそれでも、はつきりと言ってしまおう、その英雄は

呼び出される前から壊れてコッレテいたのだと。

・・・夢を見ている

目の前には、静かな湖

今まで、見た事のない美しい水面が見える。

ああ、カメラが欲しい、今この景色を写真に残したいのに

・・・でも、こういうのも悪くないな・・・ああ、本当に・・・

『！』

・・・誰だ？

『！』

悲鳴？いや、こねは・・・

『！』

・・・泣いて、いるのか？

思わず、声の主を探そうと、自分はその場を動こうとして・・・

』

！！！！！！！

『！！！！！！！！』

その凄まじい咆哮に中てられて、そのまま意識を飛ばしたのだった。

・・・。。。。けれど

最後に、湖の畔に人影が見えたような気がした。

姿も、顔も、何故泣いていたのかも分からない。

ただ、それが何故か酷く

．．．目を覚ますと、そこは自分の部屋だった。

「う．．．？」

呆然と、見知っている天井を見つめながら、雁夜は瞬きを繰り返した。

そのまま現状を把握しようと、鈍い頭を回転させる。

（は？何だ？何で俺は部屋で寝てたんだ？昨夜は確か地下で．．．
っ！）

サーヴァントの召喚、現れた二つの人影、倒れた自分、そして

「ああ、気が付いたようですね、マスター」
「っ！？お前っ！」

やっと昨夜の事を思い出したと同時に、顔を覗き込まれて息を呑んだ。

肩にかかる程度の銀髪が揺れ、蒼色の瞳が穏やかな雰囲気を漂わせている。

見様によつては女性とも思える風貌でありながら、そのしつかりとした声が、

【彼】を男性である事を示している。

だが、即席とはいえ魔術師である雁夜には分かる。

その身に溢れる魔力は、決して並みの存在には保持出来ない量である事を。

何よりも、目の前の青年は、まさしくこの手で呼んだサーヴァントの一人だと。

今だ名も知らぬ白銀の騎士が、ベッド脇に立ち、自分の事を見下ろしていた。

「少しは回復しましたか？随分と消耗していたようですので、勝手とは分かっていましたが、お部屋に運ばせて頂きました。」

「あ、ああ・・・というか、此処まで運んでくれたのか？ありがとうな。」

にこり、と笑顔を浮かべて告げる騎士に、雁夜は戸惑いながらも礼を言う。

実際、地下に放り出されたままでは辛かったので、その行動はありがたかった。

下手に残っていれば、臓硯に何を言われ、何をされるか分かったものではないからだ。

・・・と、そこまで考えて、雁夜は唐突に思い出した。

<マスターすいません、ちょっと眠っててください・・・今から、その人外をぶち殺しますので。>

「っおい、お前あの後・・・！」あ、大声禁止ですマスター、その少女が起きてしまいます。「・・・はっ？」

ベッドから上半身だけ起き上がり、雁夜は声を荒げようとしたが、そのままある場所を指さして言ったサーヴァントの行動に釣られて視線を下げる・・・と。

「えっ！？ちよ、桜ちゃん！？何で此処にむぐっ！？」
「ああだから、マスター静かにしてあげてください……」

自分の隣で、すやすやと眠っている、大切な少女の姿に本気で驚いた。

雁夜は思わず絶叫し……ようとして、サーヴァントに手で口を塞がれた。

勿論、すぐに離してくれたのだが、どういふことだと小声で問い詰めれば、あっさりと返答が帰ってきた。

「……つまり、俺を運んでいる最中に、桜ちゃんに出くわしたと？」

「はい、そしてマスターが死ぬのではないかと危惧されたようでした、一緒に傍にいたいと。」

「さ、桜ちゃんが……そんなに俺を心配してくれたのか……？」
「そうですね、実際【我ら】が此処に居るので大丈夫と説明はしましたが、

『おじさんの傍にいる』、と言われてそのままベッドに潜り込んでしまいました。」
「……っ」

サーヴァントの言葉に、雁夜は息を呑むと、眠っている桜の頭を優しく撫でた。

そうして、この事実が夢ではないと思い、喜びで胸が震えた。

昨夜、召喚の儀式を行う前に、完全に変わってしまったのではないのかと不安になった少女の姿。

自分に家族と呼べる存在はいないと、諦めてしまっていたこの子が、自分を案じてくれた。

まだ、桜の心は壊れてはいない！今ならまだ、桜の笑顔を取り戻せるかもしれない！

（桜ちゃん・・・まだ、まだ君は間に合うんだ！必ずこの家から君を開放してみせる！

だから、待っていてくれ・・・あの【約束】は、必ず果たしてあげるから！）

そう心の中で誓い、麻痺していない右手を握り締める雁夜の姿を、サーヴァントが見つめていた。

穏やかに笑う白銀の騎士と・・・もう一人、姿を見せていない、狂っている黒き騎士が・・・

ただ、その姿を、見つめていた。

夢幻湖畔（後書き）

前回の終わりから、雁夜おじさんのターンです。色々と飛んでいる展開ですが、この幕間もその内語られる事になります。

そして、ここから雁夜おじさんの聖杯戦争が幕を開けていきます。

原作とは違った運命、あり得ないサーヴァントとの共闘、そしておじさんが視た【夢】は・・・

今回は『主従契約』、おじさんとドラグーンの対話をお楽しみください！

それでは、ここまでの朗読、ありがとうございましたm（――）

m

主従契約（自己紹介編）（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーバントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

主従契約（自己紹介編）

「・・・さて、何処からお話ししましょうか・・・」

「とりあえず、全部だ。俺が気を失ってからの事を話してくれ。」

場所は変わって、雁夜達は間桐家のリビングに移動していた。

眠っている桜をそのままにしておくのは可哀そうな気もしたのだが、穏やかに眠っていられるのも良いことだろうから、そっとしておいてあげた。

下手に会話を聞かれるのも拙いので、余り人のいないリビングでの会話。

運も良く、今はあの爺が眠っている朝なので、遭遇する事もないだろう。

「そうですね、では、マスターには最初にお詫びしておかなければいけません。」

「・・・やっぱり、爺は殺せなかったのか・・・」

「!・・・怒らないのですか？」

「そんな簡単に殺せる奴だとは思っていない・・・そもそも、臍硯アレが本当の姿かも怪しいんだ・・・けど、サーヴァントでも奴は殺せないのか・・・くそっ!!」

だんっ!とテーブルに右手を振り下ろす雁夜に、サーヴァントは少し眉を潜める。

そのままスッ・・・と周囲に目をやると、微かに【微笑んで】声を

かけてきた。

「マスター、少しよろしいでしょうか？」

「何だ？」

「ええ、少し時間を取らせる事になってしまいましたが、お話しい事がありません。」

出来る限り【集中】して聞いてください。」

「？・・・ああ、分かった。」

その笑顔に、何故か呼び出した時と同じような【違和感】を感じながらも、雁夜は了承する。

サーヴァントは嬉しそうに頷くと

「そうですね、ありがとうございます。」

『とりあえず、重要な事だけはパスを介して念話で話す、聞き逃さないでほしい。』

「・・・！」

口になっているのは、全く別の口調で精神に直接語りかけてきた。

「私は貴方の名前を知りません、そして貴方は私のクラスを知らない・・・まずは自己紹介をしたいと思います。」

『声に出して情報を口にするのは危険だ、何処に目があり耳があるか分からない。』

私が重要な事を話す時は念話を使用するので、出来れば早く慣れて貰いたいんだ。』

「っ・・・あ、ああそうだな、俺の名前は雁夜だ、間桐雁夜。」

『わ、分かった・・・けど、この声に出して話す必要はあるのか？少し混乱しそうだ・・・』

「カリヤですね、ありがとうございます・・・私は『ドラグーン』のサーヴァント。真名は・・・。」

『混乱するのは無理もないだろう、しかし、これも【敵】の目と思考を欺く為だから耐えてほしい。』

それと・・・』

「・・・申し訳ございません、実は同時召喚による弊害か、記憶が曖昧で思い出せないのです。」

『実は、魔力供給による供給量が少なすぎるせいで、ステータスが大幅に減少して弱体化しています。』

これではまともに戦うどころか、【自動で発動している】以外の宝具も使えない。それと、真名は忘れてないですが【今は】秘密です。』

「『えええええええ！？』っ・・・何がはあっ！？・・・」

「カリヤ！大丈夫ですか！！」

とんでもないカミングアウトに、思わず立ち上がり体と心で驚きの声をあげてしまう。

そのまま血を吐き蹲る背中を、ドラグーンが慌ててさすってくれ。だがそんなことどうでもいい、というより無視出来ない内容が多すぎてパニックになりそうだ！

「ちよ、おま！魔力が足りないって！どういう事だ！？」

「それはマスターが、バーサーカーか私のどちらかのみを呼んだのではなく、二人召喚したのが原因です。」

「そもそもこの状態で済んでいるのも、私の保有スキルとその右手の【宝具】のおかげなんだ。」

出なければ、カリヤも私もバーサーカーもとっくの昔に死んでしまっているぞ。」

「あ・・・そういえば、バーサーカーは何処なんだ？」

「カリヤ・・・彼ならずと貴方の傍に控えています、彼も私も貴方の命令無しで勝手な行動はしません。ましてや供給量が少ないのは私が引き受けていますが、彼の消費量が多いのです。」

出来る限り温存する時はしておく方が得策ですから。」

「勿論、カリヤが眠っている間は私も霊体化していた、必要以上に現界していると魔力が勿体ないのもあるがカリヤへの負荷が大きす

ぎる。

今現界しているのは、カリヤに今までの状況の説明やこの話を話す為だ・・・バーサーカーは喋れない、その為私とその役を一任したんだ。

だがそれに力を発揮し、この状態を維持しているのは、カリヤが今している【指輪】に他ならない。』

その言葉に、ふと自分の右手を見ると令呪の刻まれているその手の指に、金色の指輪が填められていた。

自分の枯れ木のようになってしまうっている指に、しつかりと填まっているのが逆に不思議で戸惑いながらも雁夜は聞き返す。

「これは・・・何だ？俺はこんなの・・・」

「勝手な行動とは分かっていましたが、召喚されて気を失われた後、私が付けさせていただきました。

それは【ある人物】の宝具なのですが・・・現在、私が【預かっている】だけのモノです。マスターの魔力を多少回復してくれます。

」

『その【宝具の能力】は、本来の持ち主しか使用出来ません。』

その為、現在その指輪は周囲の^{マジックアイテム}大気を吸収し・装着者に供給してくれる程度の、便利な魔法道具に成り下がっています。

・・・最も、一度装着すれば、仮の持ち主である私が死なない限り、外す事の出来ない【呪い】がかかっていますが。』

「・・・とりあえず、宝具はともかくステータスはどれだけ下がっ

てるんだ・・・後、お前結構性格悪いだろ？」

「ステータスについてはバーサーカーのも方も、纏めてマスターとしての能力で確認して頂ければ早いでしょうが・・・意外な事を言いますねカリヤ、私はこちらが【素】ですよ？」

『正直な所、この状態では他サーヴァントとの戦闘は避けた方がいいので、カリヤはバーサーカーと行動してください。』

私は出来るだけ魔力供給手段を何とかします、共倒れだけは絶対に避けなければならない。

それと、これは忠告だ・・・いくら指輪の供給があっても、サーヴァントの維持に必要な魔力の持ち主はあくまでもカリヤだ、バーサーカーを暴走させればその分の負担は【自分自身】で払う事になる。

通常の戦闘なら指輪の魔力だけで耐えられるが、【暴走だけ】はさせるな。死ぬぞ。』

「・・・そうか、よく分かった、肝に銘じとく。」

「理解して頂けたようで何よりです、カリヤがマスターで私は嬉しいです。」

にこにこ笑っているとしているドラグーンを、雁夜は微妙な気持ちで見ている。

確かに、自分を案じて色々と行動してくれているように見えるし、その発言も的外れではないのだ。

このサーヴァントの言っている事は、確かに正しいのだろう。

だが、悪意に満ちたこの屋敷で過ごしていた雁夜には　　その

言葉を、心から信じる事は出来なかった。

何故ここまで徹底的に情報の秘匿をしたいのか、仮にもマスターである自分に真名を明かせないのは何故だ。

それに・・・酷く嘘くさい気がするのだ、さつきから笑っているが、

【笑顔】《コレ》は本当に信用出来るのか？

本当に、心から笑っているようには見えない、まるでそう・・・出来の良【仮面】でも見ているような・・・。

「カリヤ、とりあえず部屋に戻りましょう。そろそろあの少女が目覚ましてもいい頃です。傍にいて差し上げた方が良いかと。」

「あ、ああ・・・そうだな、桜ちゃんも俺がいなくなってたらきつと驚くしな。」

だが、ドラグーンに声をかけられ、雁夜はその考えを後回しにする事にした。

部屋においてきてしまった桜が心配だし、もし一人きりの状態に戸惑っていたら可哀そうでならない。

この屋敷で桜の味方は自分だけなのだ、出来るだけ一緒にいてあげたい。

そう考えると、雁夜はドラグーンと恐らく近くにいるだろうバーサーカーを連れて部屋に戻っていったのだった。

< キキキ >

その数分後、その場に一匹の蟲がいた事に、気付かないまま。

・・・ちなみに、その後、言われたとおりにサーバントのステータスを確認した雁夜が、
ドラグーンとバーサーカーに対して内心愚痴を呟いていたのは、彼等だけの秘密である。

（何でこんな・・・っ宝の持ち腐れ状態になってんだああ！（泣））
（さて、これからどうやって戦うかな・・・暫くは【頭】で戦うしかないか？）

主従契約（自己紹介編）（後書き）

自己紹介編はこれにて一度終了です。

次回はお互いの目的についての確認に移ります。

雁夜の願いは、果たして二人のサーヴァントに受け入れられるのか？

次話「主従契約（参加理由）」を、お楽しみに・・・

ステータス情報が更新されました くマトリクス*1く (前書き)

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。

それでも見てやろう!という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

今回は二人のサーヴァントの情報更新です。

雁夜おじさんが把握できている内容が増える度に随時更新されていく仕組みになっています。

その時は改めて【ステータス情報が更新されました】、という項目を作成します。

徐々に明らかになっていきますが、どうかご了承くださいませm)

—) m

・12/24 追記

バーサーカーの狂化ランクについて、感想で知らせてくれた方がいらっしやいました。

話の流れの為、正しく修正しなおしました。

ご指摘ありがとうございました!

ステータス情報が更新されました (マトリクス*1)

今回は本編ではありませんが、見ていってくださると嬉しいです！
ちなみにステータス&宝具は、雁夜おじさんが二人の能力を把握するたびに更新されます。
現在は秘匿されている情報もあるので、見れない！と思うかもしれませんが、
どうかそこはご了承くださいませ；

ステータス情報が更新されました。

【クラス】 バーサーカー

【マスター】 間桐雁夜

【真名】 ????????

【性別】 男性

【身長・体重】 191cm 81kg

【属性】 秩序・狂

【筋力】 A 【魔力】 C

【耐久】 A 【幸運】 B

【敏捷】 A 【宝具】 A+

【クラス別能力】

・狂化 D(C)

本来ならばCで召喚される筈だったのだが、

ドラグーンが同時召喚された【弊害】によりランクが1ダウンした。

その為、ギリギリ理性を残し、簡単な思考ができ、通常の会話はかるうじて意思疎通ができる程度になっている。

しかし、一度戦闘となれば箍が外れ文字通りの止まることを知らない狂った戦士となってしまふ。

【保有スキル】

・精霊の加護 A

精霊からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。

その発動は武勲を立てうる戦場のみに限定される。

・無窮の武練 A+

一つの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。

心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあっても十全の戦闘力を発揮できる。

【宝具】

・ 『????????』

ランク：A++

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

使用されていない為、詳細は分からないが発動は可能状態。

・ 『????????』

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

召喚された時から発動していた自らのステータスを隠蔽する能力。その他にも相手に成り代わる能力も持っているが、狂化の影響で変装することは出来ず、黒い靄で存在を隠す程度に劣化している。

令呪の使用によって本来の能力を発揮する事が可能。

・ 『????????』

ランク：A++

種別：対人宝具

レンジ：

最大補足：

バーサーカー本来の宝具。

使用されていない為、詳細は分からないが、ある条件を満たす事で使用出来る。

【補足】

通常ならば意思疎通が困難なバーサーカー、しかしドラグーンと同時召喚をされてしまった為、こちらにも多少の弊害が出てしまった。

狂化のクラスが1ランク低下したせいか、単純な会話ができるようになってきているようなのだが・・・？

本能的にドラグーンを警戒している、逆にマスターである雁夜には何故かぎこちない。

しかし戦闘になれば無類の力を発揮する、まさに無双の強さを秘めている。

【クラス】 ドラグーン

【マスター】 間桐雁夜

【真名】 ????????

【性別】 男性

【身長・体重】 176cm 63kg

【属性】 中立・善

【筋力】 C 【魔力】 C

【耐久】 C 【幸運】 C

【敏捷】 C 【宝具】 EX

【クラス別スキル】

・ 龍殺し A

かつて幻想種たる竜種を退治した逸話を持つ英霊にのみ与えられるスキル。

あらゆる竜種とその因子を持つ者に攻撃する事で、通常よりもダ

メージに大幅な補正がかかる。

・ ??? A

現在は発現する事が出来ない・・・

【保有スキル】

・ 自己魔力生成 B

その身に竜の因子を宿している為、僅かな魔力供給でも自らの内で増幅可能。

しかし供給される魔力量によってその増幅量も変化する為、供給量が少ないと宝具が使用出来なくなる。

・ 奇襲 A

生前の戦闘経験から派生したスキル。

このスキルがAの場合、あらゆる状況からの奇襲は成功する。

ただし、同ランクの『直感 A』スキルを持っている者には回避される事もある。

・ 言語理解 C

あらゆる存在の『言葉』を理解出来るスキル、ランクが高ければ高い程理解出来る種族の枠は増加する。

Cの場合は動物の言葉が理解出来る程度。

・ 神性 C (B)

神霊適性の高さ。

高ければ高い程、神との交わりが深いことをしめしている。

だがドラグーンの神性は【なんらかの理由】で低くなっているようだ。

【宝具】

・ 『????????』 EX

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

常時発動型の為、本人に影響を与える。

既に使用されているらしいが、今回は教えてもらえなかった。

・ 『????????』 A+

種別：対人宝具

レンジ：1～10

最大補足：1人

魔力不足の為使用不可

・ 『????????』 EX

種別：対界宝具

レンジ：1000～3000

最大補足：1000人

魔力不足の為使用不可、しかし【消滅】を前提でならば使用可能

・ 『????????』 B

種別：?????

レンジ：?????

最大補足：?????

雁夜にドラグーンが渡した指輪、だが本来の所有者は別にいるので、本来の使い方は出来ない。

ドラグーン曰く「預かっているだけ」との事、本来の所有者以外が身に付けると、

ドラグーンが装着者が死ぬまで外せない【呪い】がかかっている。

【補足】

本来ならば呼び出される筈が無かった八番目のサーヴァント、正規のクラスの枠が無かった為に「ドラグーン」のクラスで現界した。

その能力はバーサーカーと同程度か少し上の筈なのだが、現在はバーサーカーに雁夜の魔力が行くように自らパスを狭めた。

その為、極度の魔力不足に陥り全ステータスが激減してしまっている。

それどころか常時発動型の宝具以外が使用不可能という、いつ倒されても不思議ではない状態にまで追い詰められている。

しかし本人はその状態をそこまで気にしていない様子であり、穏やかに笑いながらも雁夜やバーサーカーに一線を張るような態度をとっている。

何を目的とし、何を考えているのか今一つ理解出来ない青年であるが、

【雁夜を守る】事に関しては積極的のようだ。

ステータス情報が更新されました くマトリクス*1く (後書き)

今回はステータスの更新を行いました、前回の雁夜おじさんの叫びが聞こえるようです；

最強だと思ったら、恐ろしい程の魔力消費量で自分が吐血しまくるのが確定のサーヴァント。

最強かと思いきや、一気に底辺付近まで下がったステータスと魔力不足で全力で戦えないサーヴァント。

・・・これは大変です。

ここから雁夜おじさんはどう戦っていくのか？

二人のサーヴァントはどうするつもりなのか？

少しずつ運命は捻じ曲がっていきますので、これからも頑張って更新します！

それでは、此処までの閲覧、本当にありがとうございました！

主従契約（参戦理由）（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入する都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

今回は注意点があります！

ドラグーンが微妙に雁夜おじさんに冷たいです、ぶっちゃけ酷いです（精神面に）

もうやめて！おじさんのライフはもう0よ！な冷たさになりそうなので、

そんなの見れるかああああああああ！という人はここでどうかUターンをお願いします。

あと、バーサーカーの大まかな内面の声が最後に出ます。

狂ってるから平仮名表記が多いので、見づらいますが、そこはどうかご了承くださいませm（――）m

ここまで読んで、それでも見たい！と言ってくださる方だけスクロールをお願いいたします。

前書き閲覧、ありがとうございました。

主従契約（参戦理由）

部屋に戻ると同時に、雁夜に何かが突進してきた。

「かりやおじさん・・・っ」

「え、桜ちゃん？どうしたの!？」

ぼすっ、と音を立てて引っ付いてくる少女に、雁夜は思わず目を見開く。（右目だけだが）

その声に、おずおずと顔を上げると、小さく少女は呟いた。

「あのね、起きたらおじさんがいなくて・・・少しビックリしちゃったの。」

おじさんが、いなくなっちゃったのかと思って・・・。」

「さ、桜ちゃん・・・!」

その時、雁夜の中では喜びが溢れていた。

（桜ちゃんが俺を心配してくれた!しかもちゃんと表情が、感情が出てるじゃないか・・・!）

どうしたんだろう?でもこれなら俺が聖杯さえ持ち帰ってくれば、葵さんや凜ちゃんに、桜ちゃんが笑顔で「ただいま」を言えるかもしれない・・・!）

それは、何よりも大事な事だった。

たとえ自分がその光景を見れなくても、すぐに死んでしまう命でも、彼女達の幸せを願うなら、桜の感情が戻っているに越した事はないのだから。

ふと、雁夜は思う。

とりあえず、ずっとこの部屋にいたのだろう・・・だが、あの爺がそれをよく思うだろうか？

下手にあの蟲爺に桜を傷つける口実を与えるのは拙い、そう判断すると、優しく桜に笑いかけた。

「桜ちゃん、そろそろお部屋に戻らなきゃ。

おじさんも少し休むし、一旦自分のお部屋でゆっくり休んでおいで。」

「おじさん休むの？ねえ・・・おじさん、桜も一緒にいたらダメ？」

こてり、と首をかしげて見つめてくる少女の姿に、雁夜は思わず頷いてしまいそうになった。

だが、いや待てそれは拙い、と何とか思いとどまると、桜の頭を優しく撫でて謝っておいた。

「ごめんね桜ちゃん、おじさんは昨日の大事な儀式で少しだけ疲れちゃったんだ・・・。

だから、ちよつとだけお部屋で待つてくれないかな？休んだらまたお部屋に会いに行くから。」

「うん・・・分かった・・・。」

少し寂しそうに見えたのは気のせいだろうか？

桜は雁夜の手を少し名残惜しそうに見つめると、自分の部屋に帰って行った。

（おじさん、桜を・・・ないでね。）

「えっ？」

ふと、何か、聞き逃してはいけない言葉が聞こえたような

そうして、パタリと扉は閉まった。

「・・・では、色々とお話したい事があります、カリヤ。」
「何だよ？これからの方針はもうしただろ？」

桜が出て行った後、霊体化していた筈のドラグーンがその姿を現した。

魔力不足の為に、現界するのも辛い筈なのに一体何だというのか。

「いいえ、私達は貴方の【願い】を知りません。一体何をもってこの戦争に参加するのか？」

従者である身としては、やはり知っておかねばと思ひまして。」

「あ
」

そういえば、言っていなかった。

いや、何となく伝わっているんじゃないかと思っていたのだが、具体的な事は全く言っていない。

確かに、これでは呼び出した側としてもどうかと思うし、彼等の主人としては問題があるのかもしれない。

「わ、悪い・・・そういえば、言っていないよな・・・」

「いえ、別に言えないというのであれば構わなかったですし、それでいいとも思っていました。」

それに・・・あの少女、明らかにこの家とは違う気配がしましたので。」

「!・・・分かるのか、お前。」

「生前、そういったモノには深く関わりがありました・・・呪いのような物には特に。」

「っはは・・・呪いか、成程な、ピッタリじゃないか。」

この家の人間の血筋は【呪い】みたいなモノなのか・・・っ!」

ぐっ、と拳を握り締める。

この家は呪われている、確かにそうだろう、あの蟲翁の妄執が染み
ついているのだから。

その血が流れているこの家の人間が、呪われていたとしても、雁夜
は不思議に思えない。

「ああそうだ、桜ちゃんをこの家から解放して、元の家族の元に帰
す。」

それが俺の願いだ・・・あの爺に聖杯を渡せば、彼女を実家に帰
すとあの妖怪はそう言った!」

「成程、等価交換だという訳ですね。」

血筋の問題は魔術師には重要だと聞いた事はありません、その見返
りに必要なのが聖杯・・・。」

「その為にお前達が必要だった、この戦争に参加しない事には、聖
杯は手に入れられないからな。」

その言葉を聞くと、ドラグーンは何か考え出した。

少し眉間に皺が寄っている・・・このサーヴァントは、

何かと頭が回るようだが、今の話に納得してくれてないのだろうか。
・・・?

そう考えて不安になっていると、唐突に何かに気付いたような顔を
して、戸惑った様に微笑んできた。

そうして

「・・・カリヤ?それで、勿論この事は彼女のご家族に伝えている

のですね？

彼女の家族は魔術の家系でしょう、なら力になってくれるのは前提の上での話で問題は無いですね？」

そんな、事を、言った。

「何、言ってるんだ・・・そんな訳ないだろ？桜ちゃんをこの家に養子として【売った】のは、

あの子の父親で、遠坂時臣っていう魔術師の、クソ野郎なんだぞ・

・・・！」

「・・・カリヤ？」

「そうだ、アイツのせいだ！アイツがあの子を此処に、よりもよって此処に養子になんてしたから！」

葵さんも凜ちゃんも！桜ちゃんもずっと泣き続けているんだ！」

突然の雁夜の変貌に、ドラグーンが【驚いたような】表情を見せた。それがどういふ事なのかを、理解する事もなく、雁夜はただその憎悪を吐き出していく。
まるで
何かか憑りついたかのように。

「そうだ、葵さんが、彼女が笑ってくれていればそれで良かったのに！」

俺は彼女を幸せに出来ないから、アイツならそれが出来ると信じてたから託したのに！

凜ちゃんや桜ちゃんも生まれて、ずっと幸せそうに笑ってて・・・それだけで、それだけで良かったのに！」

「・・・理由は？聞いたんですか。」

「聞ける訳ないだろう！アイツは魔術の大成の前にはどんなことでもどうせゴミ程度にしか見えてないんだ！」

魔術師の名家に生まれ、周囲の期待に応える事が当然で、それ以外の幸せなんて存在しないと思ってる。

桜ちゃんを養子に出したのが証拠のような物だ！一緒に育てる事も出来た！魔術師として育てる必要なんて何処にあっただんだ！？あの子は【家族】と！凜ちゃんと葵さんと笑えてたのに！！」

先程の寂しそうな桜の顔が、頭から離れない。

今日まで、感情を殺していた桜が、どんな形であれ感情を取り戻している。

だからこそ余計に怒りがこみ上げる。

「それをアイツが！時臣の奴が！桜ちゃんを間桐の家に売ったからだ！」

彼女の母親である葵さんも、姉妹である凜ちゃんも悲しませて！

なのにそれが正しい事だと、平然と彼女達の【当たり前前の幸せ】を踏みにじった！

一緒に生きる事の幸せを・・・魔術師だから！？聖杯が欲しい！？根源に至る！？

そんなモノの為に・・・ッ桜ちゃんは家族と引き離されて蟲に犯されるのが【当然】なのか！？

桜ちゃんの父親のくせに、アイツはそれを魔術師という理由だけ

で、こんな家に売り払った・・・！」

その笑顔を壊した原因が、その涙が失われる事になった原因が、何をもって【桜の幸せ】を考えているのか！

「俺は時臣を殺す！そして聖杯を手に入れて桜ちゃんを開放する！
彼女は葵さんと凜ちゃんとまた一緒に、【3人】で笑って暮らす
事が出来るんだ！」

幸せそうに、当たり前の日々をもう一度・・・！取り戻す事が出
来る！だから・・・！」

「カリヤ、貴方の願いは【少し可笑的】ですよ。ああ、いつそ笑
えてしょうがない。

彼女が父親に売り捨てられ、それを救う為に戦う、それが【理由】
なら問題は無いでしょう。

しかし、それならば何故

それが、彼女の【父親

殺し】に切り替わってしまうんですか？」

「えっ・・・？」

その言葉に、一瞬呆けた。

目の前の、静かに微笑んでいるサーヴァントの、水を差すような声
に。

「はっ・・・お前、何・・・？」

「だから、分かりませんか？貴方の願いは壊れています、このまま
ではあの少女は救えない。

今のままなら・・・その結末はきつと【ろくでもないもの】にな

る。」

「っ！お前何が言いたいんだよ！俺は桜ちゃんを助けたいだけなんだぞ！？それが悪いって言うのか！？」

困ったように失笑して返された言葉に、雁夜は怒りのままに怒鳴りつける。

その姿に目を細めると、ドラグーンは雁夜に笑いかけて言い放つ。

「別に？人助けはいい事ですよ、それは【良い事】です、でも【手段】が可笑的い。」

貴方はそれを理解していない、いいえ、それに気付こうとしていない。

貴方がしたいのは人殺しですか？貴方がしたいのは人妻の略奪ですか？それともあの少女の救済ですか？

だから可笑的い、貴方は自分の気持ち【何処に】向かっているのかも、

その手段が、【何を引き起こす】のかも、全く理解出来ていないのだから。」

「黙れっ！そんなの大した事じゃないっ！何の問題もあるわけないだろう！？」

葵さん達がそれで笑える！もう泣かなくてもいいんだ・・・っ！
？ぐっごほがっ！げほっ！」

ぼたぼた、と口から血が溢れだす。

確かに、興奮してしまっただせいだろう、蟲が活性化して体の中を暴れまわる。

痛くて、痛くて、苦しくてたまらなくて、思わずベッドに倒れ伏してしまふ。

その様子に、はっ、としたように顔色を変えると、笑顔を消したドラグーンが背中をさすってきた。

「っ!?!?・・・カリヤ!もういい、これ以上は喋るな、興奮しすぎて蟲が・・・!」

・・・ああ、こんな嫌な奴だったなんて、そんな奴に心配されるなんて、本当にイライラする。

こんなでもマスターで俺が死んだら困るからか、今更案じるような事をされても腹が立つだけだ!

そう考えると、雁夜は背中に触れるドラグーンの手を払い飛ばし、血と蟲を吐きながらも絶叫する。

見たくなかった、これ以上このサーヴァントの顔を見ていたくなんてない。

何を言いたいかも分からない、何を考えているかも分からない、その本心も真名も、何も語らないような奴は信用出来ない!

これなら何も言わないバーサーカーの方がずっと良い!

「煩い!お前には分からないだろう!?!あの子が奪われたモノの大きさを!痛みも悲しも絶望も!

あの子はこのままじゃ本当に壊れてしまっ！俺みたいな体になっ
てしまっかもしれない！

幸せになれる筈のあの子が、家族と笑いあえる筈のあの子が、こ
のまま地獄に居続けるなんて！

そんなのおかしいだろう！悪いのはこの家から逃げ出した俺だ！
悪いのはあの子を捨てた時臣の奴だ！

人の命を喰って生き続けるクソ爺だ！あの子は・・・！桜ちゃんは・
・何も悪くないのに！！！！」

「・・・カリヤ、それでも、その願いが正しくても、そのトキオミ
を殺せば必ず破綻する。

自分で気付けなければ、多くのモノを犠牲にして巻き込んでお前
は自爆するだろう。

だから早く理解しろ、ソレが何を引き起こすのかを、でなければ・
・・・・・そう遠くない未来、お前自身は破滅する。」
マトウカリヤ

「煩い！もういいお前は桜ちゃんの傍にいてあの子を守れ！いくら
弱くなってもそれぐらいは出来るだろう！？」

俺にはバーサーカーがいるんだ！お前の助けなんて必要ない！早
くこの部屋から出ていけっ！！！！！！」

「そうか、分かった・・・確かに今は私はいない方がいいだろうな・
・・」

少しだけ、小さく自嘲するように笑うと、ドラゲーンはその背を向
けた。

ふと、何故かそれが酷く悲しげに見えて、一瞬罪悪感が湧くがそれ
を無視する。

それももしかしたら嘘かもしれないのだ、自分の役に立てるといっ
なら、桜を守る盾ぐらいになればいい。

そう、思った。

「・・・これだけは言っておく、私は【カリヤのサーヴァント】だ。カリヤに危険が迫った時は、何があっても何を犠牲にしても、必ず助けに行く。」

信頼なんていらない、信用何てしなくていい、ただそれだけを・・・
・忘れないでくれ。」

そう言い残すと、ドラグーンは部屋から廊下へと出て行った。その姿を見送ると、雁夜はそのままベッドへ倒れこむ。

「っ俺は間違つてなんていない・・・時臣を殺して聖杯を手に入れば！」

葵さんを、凜ちゃんを、桜ちゃんを救えるんだ・・・！」

・・・雁夜は気付いていない、そう呟いている自分自身が、何よりも不安そうな顔をしている事に。

今だ現界する事無く、傍にいるバーサーカーの気配が、少しだけ戸惑っている事に。

ただ握り締めたその右手で
が、悲しく光っていた。

金色の指輪

追い出された廊下で、ドラグーンは移動を開始する。

どんな形であれ、命令を受けた以上『桜』を守らなくてはならない。

「『捨てられた痛みは、捨てられた者にしか分からない』・・・そうだろうな、それは事実だカリヤ。

捨てられた事の無い人間が、その痛みを理解するなんて、到底出来る事ではないだろう。

口先だけの慰めや勘違いの正論を向けたところで、それは所詮ソイツの勘違いと思いがりに過ぎない。」

酷い事を、言った自覚はある。

だが矛盾は突きつけなければならない、中途半端な願いは、命と心を削るだけだ。

これから始まるのは、魔術師達の何一つ顧みない殺戮と絶望の戦い・・・だからこそ、それは命とりだ。

ただ、もっと傷つけないように言えなかったものかと、己のこの性格に吐き気がした。

・・・カリヤが言うのも最もだ、あの娘の父親はどんな理由があれ、自分の娘を地獄に売ったと言われてもしょうがない。

内側でこれだけ酷いことから、一般人はともかく、この屋敷がおかしいのぐらい魔術師なら遠目に見ても気付く筈だ。

ましてやあの話を整理するなら、相手はこの土地の管理人であり責任者、自分の土地に住んでいる魔術師を把握出来ない等、問題どころの話ではないのだ。

例えるならば、それは【一国の城主が、国に属する悪徳領主を野放しにする】のと同じだ。

狡猾な領主が、表では民を慈しんでいるかのように見せかけて、裏では恐怖と暴力で縛り上げ横暴しているのを、

それが原因にして国が亡ぶ一歩手前、手遅れになるまで何もしないのと同じようなモノ。

では、その場合の城主とはどんな存在だろうか？

決まっている【横暴を容認している暴君】か、

【建前と上辺に騙されている暗君】のどちらかだ。

（数代に及ぶ管理人という時点で、暴君の方がと思っていたんだが、それも怪しいな。

もし他の成すべき事をしっかりやれているのだとすれば・・・恐らく、実の娘を引き渡す【家】を、碌に理解してなかった暗君だろ

うな。

600年という年月が【何も狂わせない】という保証がどこにある？何を過信していたのかは知らないが、あの蟲爺を信用したのか？正気かその魔術師は？

多くの人を喰らい、慈しむべき大地に寄生すると共に瘴気で穢し、たった一つしかない命の尊さを侮辱する、あの怪物を。

その結果が自分の娘の悲劇と絶望だと、気付いているのかどうなのかは知らないが、正直・・・気に食わない。）

そう、ドラグーン自身は、母娘を傷付けたのが赦せないと憤る雁夜の気持ちも、分からなくは無かった。

そこに矛盾があっても、そこに初恋の女への恋慕が隠れていたとしても、ソレを咎める権利は自分にはないから。

何より・・・自分とて、【たった一つの幸福】に焦がれ続け、最期まで間違い続けた存在なのだから。

しかし

だからこそ、雁夜は【桜の父親】を殺

してはいけないのだ。

故に止めた、それが亀裂を生んでしまつて分かっていても。

己が主人が、どこかで間違っているというのなら、それを正すのも
マスター
サーヴァント
従者の務めだろうと言いつつ誤りまでして。

何より・・・ドラゲーンは【間桐雁夜】を気に入ってしまったのだ、
『叶うならどうか、その手を血で染めてくれるな』と思うぐらいに
は。

「・・・だが、自分自身を救えるのは、どれだけ頑張っても結局は
『自分だけ』だ。

お前も悪かった、その父親も悪かった、蟲爺が最悪だなんてそんなの
の分かりきっていることだろう。

それでも 父親に売られようと、母親に見捨てられようと、
【その前に】どうしたいかを決めるのは【自分】なんだ。

人間は獣じゃない、叫ぶ事も泣く事も笑う事も祈る事も・・・その
声で、その言葉で【伝える事が出来る】のが人間だ。

そう、その現実を言ってしまうなら、果たしてあの娘は、本当に
何も悪くなかったのか・・・カリヤ。」

ぽつりと、そう呟くと瞬時に霊体化してその場から掻き消えたのだ
った。

サイド　　?????????

くるったこえによびだされて、じぶんはそのばにたっていた。
まわりはきもちわるいくうきがあふれている。
そして、めのまえにおとこがたおれていた。
しにそうになっている、しにかけのおとこ。

(これが、『ますたー』、か)

ちをはいで、まっかにしている
ちにむしがまじっている、だがどうすればいいのだろう

めいれいをくれなければなにをすればいいのか、めいれいがくるま
でまっでいれればいいのか
そうかんがえているとしかいのはしに、『ぎんいろ』が、よぎった

【 ？ 】

・・・ちがうアレは　　じゃない

くるつおのれに、ざつねんがふえる。

いやくるっっているのに、ぎっねんがある。
なぜだなぜだこのみはくるっっているはずなのに。

りかいてきない、おとこにちがづいてふれてるアレはなんだ。

ああなにかいる、むしがいる、アレはよくないものだ。

しかしなにもしないすることはできない『ますたー』がめいれいを
くれないければ。

ぎんいろがむしとなにかいつているわからない
ますたーがたおれているわからない

この『ぎんいろ』は、なんだ。

この『ますたー』は、なんだ。

………ますたーのなまえがわかった……なまえはま
と
かりや……かりや……

かりやとぎんいろがなにかかわしている、かりやがおっっている
がぎんいろはわらっている。

(違う違う違うアレは笑ってなどいない)

かりやのねがいがおかしいとぎんいろがわらう、なにがおかしいとかりやがさげんでいる。

(アレは笑っている、表面だけが、中身は何か違うのか)

かりやはぎんいろをおいだしてしょうじょをまもれとっている、おれにはばーサーカーがいるとっている。

(バーサーカー、そうだ、私はバーサーカーだ)

そうだ、きかいだとうぐだそれでいい、ますたーのぶきで、ますたーのたてで、それだけでいいそれでこのみはいみをなすのだ、だからこれはまちがいじゃないおかしくないおかしところなんてどこにもない、ぎんいろがますたーをみするならじぶんがそのぶんまもればいいだけ、そしてかならずせいはいをこのてにすればいいのだそうすれば、このねがいも、ますたーのねがいもかなうのだ。

・・・なのにおもう、かりやのねがいがおかしいといったぎんいろが、

主従契約（参戦理由）（後書き）

今回の話は、人それぞれの捉え方があるだろうと考えて書きました。実際のところ、気に食わないという方が多かったと思います。

それをここで言うのは、言われる側の雁夜おじさんにはきつついですが、
言わないと気付かんだらアンタ、というドラグーンの意味も込めてのお話。

でも全部は教えてあげない、自分で気付かないと意味ないから、ヒントだけ出しておくよという感じですよ。

最後のバサカの思考は、狂いきれてない状態です。

本当に狂っている場合、そもそも雁夜おじさんやドラグーンに思考を向けるのはまず無理だろうと思います。

でも召喚事故の為に多少の単純な事は考えられますので、このような感じになりました。

・・・雁夜おじさんとドラグーンの会話に【何か】を感じています
が、決定的なソレには気付く事が出来ません。

もしもソレに気付けた時、どうなるのか・・・そこが気になるところですね。

それでは、ここから遠坂邸のアサシン事件に物語は移動していきま
す。

雁夜と仲違いをしたドラグーンは、ある程度の別行動をするようになります。

基本は桜の身の安全を優先するように命令を受けていますがはたして・・・？

次回、「偽装工作」をお楽しみに。

ここまでの閲覧ありがとうございました！

偽装工作（暗躍交渉）（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。ご了承ください。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

今回はアサシンの巻・・・しかし行くのは遠坂邸だがなあ！
彼等の幸運値が低いのが目に見えるようだ・・・可哀そう；

そして、ちょっとある人物の会話が入ります。

あれ・・・？こっちの方が長いかもしれない；（爆）

偽装工作（暗躍交渉）

その夜、闇を駆ける影がいた。

その影は、一つの豪邸へと向かっていた。

誰が知ろう？

その影こそが、この聖杯戦争に参加するマスターの一人が使役する。
『アサシンのサーヴァント』に、他ならないという事を。

そのアサシンは恐ろしく速く、闇を移動する姿を捉える事は容易に
非ず。

己の目の前に立ちふさがる、魔力の障壁すらなんなく突破していく。

その目的はただ一つ、己の与えられた【任務】を遂行する為に、

豪邸 『遠坂邸』へと潜入しようとしていた。

だが

影が豪邸の庭園、その強力な防御結界を張り巡らせる中枢核たる大
粒のルビーへ手を伸ばした瞬間、
その手は彼方より投擲された『剣』によって、刺し貫かれ縫いとめ
られた。

「……………！」

声もなく、己の手を貫いた剣を凝視する暗殺者。
だがその激痛に悶える間もなく、その頭上に冷やかな声がかけられた。

「地を這う虫ケラ風情が、誰の許しを得て面を上げる？」

そう、暗殺者の視線の先には、黄金の輝きを纏った影がそこに君臨していた。

さながらそれは絶対なる支配者としての風貌、金色の髪を逆立て、ルビーよりも深い深紅の瞳。

見る者が見れば、その芸術のような男がそこに立っていた。

されど、その瞳に宿るのは【己以外】の他者の存在を決して顧みることのない、暴君としての意志だった。

更に、その男はアサシンのサーヴァントに攻撃し、見事その身を刺し貫いたのだ、

ならば、その男も同じように人間ではない、【彼】もまたこの戦争へ誘われしサーヴァント……！

「貴様は我を見るに能わぬ。」

虫ケラは虫ケラらしく、地だけを眺めながら
死ね。」

…だが、アサシンのサーヴァントが考えたのはここまでだった。

男の背後が揺らめき、黄金の輝きが降り注ぐ。

そしてソレは、先程の剣と同様にアサシンを貫き、抉り、破壊しつくしていった……

遠坂邸に侵入しようとした、アサシンのサーヴァント。

その最期は剣の弾幕で刺し貫かれて死ぬという、あっけない幕引きであった。

その一方的な虐殺ともいえる光景と、恐ろしい程までの戦力差、
そうして、影に対する黄金の戦いともいえない蹂躞は、幕を下ろした。

そう……遠坂邸を監視する、あらゆる使い魔を通して監視する、
【マスター達が視ている】のを理解し、見せつけるように。

「…………アサシンが、脱落した？」

そして、勿論この様子を見ていたのは他のマスターだけではなかった。

間桐雁夜もまた、自分の一番の【敵】として認識している遠坂時臣の屋敷はずっと監視していたのだ。

だからこそ、その展開を一部始終見続けていた。

出来る限り、聖杯戦争で雁夜が避けたいのは自分の暗殺だ。いくら呼び出したサーヴァントが強力でも、自分が殺されたら意味がない。

その点については、雁夜は他のマスターよりも慎重だった。

自分が弱く、脆いのは承知している。

下手に動き回って、殺されては意味がないと、理解していたから。だから今まで、こうして間桐の家に籠っていたのだが…………

「これで、俺もこの家から移動しても大丈夫か……………」

しかし、この家に籠り、聖杯戦争に参加するのは、雁夜にとっては

拙かった。

(爺はいいが、桜ちゃんが…)

もしこの家が戦場になれば、一番危ないのは桜である。
それだけは、雁夜には容認出来ない。

彼女を救う為に参戦するのに、彼女を巻き込んで意味が無くなってしまう。

確かにドラグーンが傍にいるが、今のアサシンを殺したサーヴァントを見て、考えが変わった。

(駄目だ…今のアイツは役に立たない、

バーサーカーを維持するのに貸してくれた【指輪】でも、

逆にバーサーカーの戦闘にその魔力を全部回してしまう、

俺の魔力供給だけじゃ、アイツの魔力完全に回復させるのは難しい。

ドラグーンでは、あのサーヴァントには勝てない！)

そうになると、やはり自分がこの家から離れ、動くしかないだろう。
今はとにかく行動しなければ…と考えて立ち上がり、玄関に向かって移動していく…と

「カカカ…どうした、何を急いでおる？雁夜。」

「っ…何の用だ、臆硯…」

かつつ、と杖をついて、間桐臓硯が、その姿を現していた。

何処から出てきた、とかそんな事を聞くのも馬鹿馬鹿しい。

どうせ今の今までこちらを監視していたのだからと考えると、雁夜はその暗い相貌を睨みつける。

「ふん、貴様がこれからこの家を出ていく前に、一つ『良い事』を言っておいてやろうと思ってる。」

「何…？」

「なあに、大した事ではないぞ？」

ただ、貴様のサーヴァント共についての忠告じゃ…間違っても『信用等するでないぞ』、とな。」

「っ………！」

その言葉に顔を顰める雁夜に対し、にやり、と笑いながら翁は続ける。

「奴等とて聖杯に願いがあればこそ、貴様如きなんぞの召喚に応えたのだ

…もし貴様がマスターとして無様な姿を晒そうものなら、寝首を掛かれてもしょうがあるまいて。」

「何が、言いたい…！」

「カカカカ！まあ精々この戦争を生き残るがよいわ！貴様のその無様な姿を晒してくるがいい！」

分不相応なサーヴァントを呼び出し、その力も使いこなせず、の

たれ死ぬのが目に見えるがのう…？

まあ、どうしてもというならば、この家を寢床にするのも良からうて…それを望めるのならば、な。」

臓硯はそう締めくくると、もはや雁夜の事等眼中にもないと言っかのよつに、

暗い闇の中へとその姿を消していった…。

「っ…言われなくても、信用何てしてない…！」

ぎりっ、と右手を握り締めて、雁夜はそう吐き捨てた。

そう、サーヴァントがどれだけ素晴らしくても、自分はそれに見合うマスターではないのだ。

だから彼等がどう考えているかなんて、そんなの分かりきっている事だった。

こちらが信用をする？そもそも、あちらがしてくれている筈がないのだ、と…

暫くその場に立ち尽くしていたが、雁夜は再び玄関に向かって歩き出す。

その姿は、ただひたすらに前へと進む事しか出来ない、殉教者のような危うさを秘めていた

そうして、視点は【彼】へと移る。
ベッドに横たわる少女の傍に、一人佇むサーヴァント、ドラグーンへと。

その表情はいつもの笑顔と違い、少し複雑そうな苦い笑みへと変わっている。

（カリヤの精神が乱れているな……何かあったか……ん？私とバーサーカーに対する不信が増してる？

大方、あの妖怪か……私が今傍にいないと見越して、カリヤを不安定にするような真似をしたか。

だが油断してくれる事に越した事はない、カリヤの状態がこちらに殆ど筒抜けだなんて思ってもいないだろうからな。）

……何故、ドラグーンは雁夜が臍硯に挑発された事に気付いているのだろうか？

いや、どうやら具体的な会話まで分かっているようだが、傍にいる事を拒まれ、桜を守れと命令されている以上、少なくとも雁夜の現状をすぐに把握出来るのはおかしい。

しかし……ドラグーンとて、別に雁夜に魔力供給のパスを切られた訳ではないので、

ある程度の情報はパスを通じて伝わってくるのだ。

しかも、何故だか、召喚事故の影響と言うべきか、同時召喚はそのあり得なさで、マスターとサーヴァント二人のパスすら混線させてしまった。

実質、バーサーカーとドラグーンと雁夜の間では、【誰かの】不快感や猜疑心、そういった【強すぎる感情】がちよくちよく流れ込んでくるようになってすらいた。

これは拙いかなとは考えてもいるのだが、下手に介入するとソレに精神を呑まれる危険性があるので、今は放っておいてはいるが、いつかは何とかしなければならぬだろう。

（まあ、パスや爺は【まだ】そこまで気にするものじゃない、放っておいてもいいが……）

「……………かなり胡散臭いのに、挑発されたとはいえ、もう少し落ち着いて行動してくれ、マスター^{カリヤ}」

むしろ、多少問題のあるその混線が、今回は役に立った。

マスター^{カリヤ}の精神は少し無防備な所があるせいか、知りたい情報が流れてくる事もある。

ましてや執着する【敵】に関する内容ならば、精神の乱れで断片的にでも伝わってくるのだ。

『時臣』 『金色のサーヴァント』 『死んだアサシン』 『脱落』 『暗殺はされない』
ぼやけながらも視える光景、剣の雨に貫かれ、血の雨を降らせながら細切れになっっていく暗殺者の姿。

ああ確かに、アサシンが死んだというのは理解できる。
あれだけの剣をその身に受けて、生きていたらむしろ不気味だ。
ならば事実、かのアサシンのサーヴァントは、死んだのであろう。

……しかし、この身は【暗殺者の恐怖】をよく知っている。
奴らは闇に紛れ、背後から強襲し、音もなく対象の命を奪う者。
それらは常に相手の隙を伺い、【必殺】の瞬間にのみ、その身を現すのだ。

だからこそ
出来過ぎている】
この展開は、なんだか、【

「どうしたの？」

くいつ、と服の端を引っ張られた。
その感覚に視線だけ動かすと、ベッドで眠っていた筈の少女が、起き上がりドラグーンを見つめていた。

……ちなみに、何で霊体化してないんだ！？とかの言葉は今の彼には皮肉である。

本人はそうするつもり満々だったにも関わらず、数時間程前にマスターにパスで言われてしまったのだ。

『どうせ一回姿を見られてるんだろ、なら時々桜ちゃんが頼んだ時は話し相手ぐらいになってあげる。』

その時のドラグーン表情を、雁夜が見られなかったのは、ある意味行幸だった。

正直その瞬間、ドラグーンは自分が【笑って】いられたかあんまり自信がなかったから。

（ 本当に、どうしてくれようか、あの『小娘馬鹿』は！？

話し相手とか別にいらないだろう！寂しいかもしれないとか今の状況で言ったら拙いぞ！

いくら【指輪】が^{マナ}大気吸収に優れていても、これでは意味が無くなる！

ああでも蟲とかは確かに嫌だろうな……いや、それでも確かにあまり現界しなければ良いだけだが、

自分自身の体に対して、どうして同じように心配する事をしないのか……っ）

内心そう叫んでしまいたかったのだが、それでも命令は命令。
『分かりました、カリヤ』と、了承したのが運の付き。

昨夜、【色々】と話した少女に対して、複雑なのも原因なのだが、カリヤを優先したいドラグーンには、些か酷な命令だった。

(…まあ、こうして現界している時点で、私も大概カリヤに【感化】されているのかもしれないが、な。)

そういった流れを思い出し、溜息交じりに苦笑すると、ドラグーンは声の主に問い返す。

「……ちび、まだ起きていたのか？」

「……ちびじゃないよ、桜だもん。」

「だが小さいだろう。」

「……(むっ)」

「こら、誰が黙れと言った、言いたい事があるなら言えばいい。」

むっ……と不満気な空気を漂わす少女に、

それこそ呆れたと言わんばかりに、ドラグーンは少女・【桜】の横たわるベッドに腰を下ろした。

その姿に、ちよつと納得していないと言いたげな空気を漂わせながらも、桜は聞きたい事を言う。

「何が、『うさんくさい』の？」
「ああ、あれか、大した事じゃない……まあカリヤがこれから戦う相手が色々やらかしたただけだ。」
「っ、雁夜おじさんに何かあったの……？」
「違う、むしろこれからあるかもしれないだけだ。」
「そうなんだ……」

桜の表情が陰る、その胸に何を思うのか、ドラグーンには分からない。
それでも先日、話をした為か、微妙になら理解出来る点もあるのは事実だ。
能面のような顔に、多少の感情を持つようになったのならば、喜ばしい事なのだという事も。

だが、この娘を少しばかり利用する必要がある。
カリヤの守るべき相手でも、【ただで】サーヴァントの庇護を受けるのは不公平だろう。
籠の鳥で居続けるのを望むのか、空を舞う鳥になるのかぐらい、自分で考えてもらおう。

少なくとも、【カリヤの首輪】ぐらいには、なってもらわねばならないのだから。

「そつだな、どうしても心配なら、カリヤに『この家から出ないでくれ』と頼んだらどうだ？」

「え？」

「それか、私がお前を守るといふ立場をちょっと置いて、カリヤを影から護衛するか。」

……しかしお前を守れと指示を受けているからな。

困ったな、【カリヤが危険な事】になっても、これじゃ助けに行けないな。」

「っ！？おじさんが怪我するの………？」

「怪我だけで済んだらいいがな、もしかしたら病気になるかもしれない、

この時期に夜にフラフラ歩けば寒さで苦しむかもな、この町は余りにも物騒な状態だし、な。」

「……！」

ぎゅっ、とシートが握り締められる。

ドラグーンの言葉で、桜の心に残る『恐怖』が煽られる。

どんな形であれ、【雁夜の負担になっている】と、言われたのだ。その結果が、【桜にとって】最悪な状況を幻視させた。

『わたし桜を守って、桜の味方雁夜おじさんが、いなくなってしまう。』そんな未来を

「雁夜おじさん……ほんとに遠くへ行っちゃうの……？」

「……そうだったとして、お前桜はどうしたい？聞く前に自分で【それ】を考える。」

人に全部言わせるな、お前の気持ちを殺すな、その願いを一度口にしてみる。」

「・・・私の、気持ち・・・？」

桜はただ言われた言葉を反芻する。

自分の気持ちなんて分からないのに、と塞ぎこんでしまいそうになる。

そこで……ふわり、と優しく頭を撫でられた。

驚いて顔をあげそうになったが、桜はそのままベッドに寝かされてしまう。

見上げれば、そこには『心底呆れています』という苦笑が見えた。

「ドラグーン？」

「あのな……そんなに難しく考える必要なんてないんだ。

ソレが自分の中でどういう意味を持つのかとか、ソレをどう扱いたいとか、そんなの後にしろ。

ただ『失くしたい』か『失くしたくない』か、お前みたいなちび娘には、それだけで十分なんだよ。

なあ【桜】、お前は
今、『傍にいてほしい人』
はいるか？」

そうして、その【笑顔】を思い出した。

桜ちゃん

(雁夜おじさん……何で、桜に優しくしてくれるの……？桜は、いない子なんだよ……？)

また皆で一緒に、遊ぼう

(おじさん……桜にはお母さんもお姉ちゃんももういないのに……何で？)

いつかまた、あの公園で一緒に

(どうしてそんな泣きそうな顔で笑ってるの……？どこか痛いのか……？)

それは、おじさんが約束してあげる

(ああ、そういえば……あの人が、『桜を助_私けに』来

てくれたんだ………)

そう、蟲がいつぱいの気持ち悪い場所から、自分を抱き上げてくれた人がいた。

苦しくて辛くて、何もかも見たくなくて目を伏せてしまった自分。

それを、必死な声で呼びながら、何度も何度も謝って泣いている人が居た。

『ごめんね、ごめんね桜ちゃん……！桜ちゃんはこんな家に来る必要なんてなかったのに！

全部俺のせいだ！俺のせいで桜ちゃんがこんな目に……っ！ごめんね、本当に、ごめんね……！

俺がこの家から出なければ、魔術師になるのを拒まなければ、あの爺に逆らわなければ、桜ちゃんが養子になることも、こんな思いをすることもなかったのに……っでも、まだ大丈夫、必ずお家に帰してあげるから、この家から出してあげるから、またお日様の下を歩けるから……！

お母さん達の所へ帰してあげるからね……！おじさんが、桜ちゃんを助けてあげるから！』

……黒い髪が白になって、体がボロボロになってうまく歩けてなくて、ご飯もあんまり食べれない。

昨日はおじさんの顔が、まるで別の人みたいに見えてしまった……でも……

（そつだ、あの頃みたいに桜私を見てくれて、桜私の為に泣いてくれた…桜私を、助けに来てくれた…！！）

幸せだったあの頃、母と姉と一緒によく遊んでくれた、『雁夜おじさん』。

姉とは違い、父の期待に応えられないのが悲しくて、引つ込み思案だった自分。

そんな私桜に、当たり前のように優しく微笑んで、頭を撫でてくれたのは、他の誰でもなく

「雁夜おじさん

私桜を、一人にしない

で。」

あの笑顔が、自分は好きだから『失くしたくない』

そんな単純な【答え】、それが今、桜の中で目覚め

た。

彼女を知る者がいれば、目を見張っただろう。
それは余りにも大きな変化だった。
濁っていた眼に、僅かばかりでも意志の輝きが宿っていたのだから。

故に、少女は決意する。

「ドラグーン……お願いがあるの。」

「何だ。」

「雁夜おじさんを、一人ぼっちにしないであげて。」

上手く言えない、でも、伝えたい言葉がある。

「いいのか？カリヤはお前の身の安全を優先したいんだ、その気持ちを【無視しても】いいんだな？」

「それでも、おじさんがいないのは、嫌なの。」

約束するよと、言ってくれた、あの人に。

「そうか、なら【私も】これで動く口実を手に入れられたな、感謝するぞ【桜】。」

「……………ドラグーンって、狡いね。」

「気にするな、世の中の大人は殆どが汚いぞ？カリヤはまだマシだが。」

「雁夜おじさんは、ドラグーンと違って汚くないよ？優しいよ。」

「……………お前も結構言うじゃないか、ちびの癖に。」
「ちびじゃないもん、桜だもん。」

ただ一つ、決して失くしたくない、この気持ちを

ここに、物語は本来の道筋を変えて動き出す。
運命を変えるには、まだ多くの壁が残るけれど、
その一端を握るのは、春花の名を持つ少女である。

奏でられるは悲劇か、喜劇か？

その果てにあるのは絶望か……それとも……

偽装工作（暗躍交渉）（後書き）

今回の偽装工作については、遠坂邸と間桐邸の2つで意味がありました。

時臣側の偽装は原作もそうですが、これは意外と気付けるのではないのでしょうか…。

流石にアサシンを使い捨てるとは思わないでしょうが、なんか上手くいきすぎじゃね？と原作の数名が不信を抱くように、オリサヴァも首をかしげています。

雁夜おじさんの援護の為、今日もドラグーンは疑心暗鬼です（笑）

そして、臓硯の嫌がらせ行動に対し、ドラグーン&桜暗躍フラグが立ちました！（ピローン）
とはいっても、あくまでコレはフラグなので、実質暗躍するのはドラグーンだけです。

また、ドラグーンは桜に微妙に揺さぶりをかけていました。

もしこれで桜が何もしないようなら、それはそれでやりようがあったのですが、

やっぱりバレタ時の事を考えるなら、ねえ……？（笑）

しかし、桜ちゃんはおじさんへの気持ち思い出し。

ドラグーンにおじさんへの援護を優先するように頼みます。

・・・計画通り（ニヤリ）な、展開ですね。

でも何だかんだ言って、ドラグーンは【桜】を見直しました。

それが「お前」やら「ちび娘」やらからの、『桜』呼びへの変更で

す。

ちよびつとですが、信用関係は築きつつあるドラ&桜、雁夜おじさんよりも英霊を早々に懐柔するとは・・・桜、恐ろしい子！

さて、今回は本編の前に幕間編を挟みます。

桜が感情を少しだけ取り戻していた理由、雁夜が気を失っていた間の物語。

二人のサーヴァントの、桜との出会い編のお話です。

幕間編その1「Cherryblossom」を、お楽しみに。

幕間 〈Cherryblossom〉(前書き)

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

注意！

今回は少し桜ちゃんが可哀そうです、作者は決して桜ちゃんが嫌いではありませんが、話の流れ上そうなってしまいました。

そんなの見たくない！等の意見をお持ちの方は、申し訳ありませんがUターンをお願いいたしますm(_____)m

幕間 〽Cherryblossom〽

それは遠い夢のような、ほんの一瞬の幸福

温もりを愛しく思い、微笑みは花の如く、その声は鈴のよう

今尚薄れる事は無き、ただ愛しき人の、その笑顔の面影よ

赦されないと知りながらも、その姿を今一度と望むのは

この身が背負う、数多の罪が、永久に許す事はないのだろう

「…………困ったな。」

ぼそつ、とそう呟いて、蟲蔵から己が主マスターを連れて出てきたドラグーンは、頬を掻いた。
その表情は些かバツが悪そうな苦笑になっているのは、決して気のせいではないだろう。

とりあえず啖呵を切って出てきたまでは良かったのだが、今更になって、この家の何処マスターに主の部屋があるのか分からなかったのだ。

多少頭に血が上っていたといえ、あそこで主マスターの気を失わせるのは早計だったようだ。

しかし、それでもあの蟲爺に聞きに戻るのは絶対に腹が立つので、とりあえず勢いのまま玄関付近に来てしまった。

……もうこのまま外に出て、この家から逃亡してしまおうかと考えたのは、ドラグーンだけの秘密だ。

「何より…何でお前まで現界している…」
「……………」

ちらり、と視線を横に向けると、そこには指輪の魔力を使っているらしいバーサーカーの姿があった。

相変わらず黒い魔力がその身を包んでおり、微妙にパスが混線してドラグーンでも今一その姿は分からない。

まあマスターの魔力を使えば、その負担になると【分かっている】
ようだ、そこは良いのだが…

（この英霊、^{バーサーカー}明らかに狂いきれてない。

…召喚の不具合か、でなければ指輪の魔力だけ選んで現界なんて器
用な真似は出来ないだろうしな。

魔力供給してくれる存在が、他のサーヴァントに保持されてれば反
応もするか…

というよりも、【私】が自分のマスターを抱えているのが嫌なんだ
ろうがな、単純に。）

明らかに敵意らしきものを向けているバーサーカーに、ドラグーン
は軽く溜息を吐いた。

どうした事か、このバーサーカーは確かに狂っているようなのだが、
その狂気が微妙に薄い気がする。

召喚事故に異常が発生しているのは自分だけではなく、バーサーカ
ーも同じようだ。

しかも、その原因が【^{ドラグーン}自分】にあると、少なからず気付いているら
しい。

「お前、本当にバーサーカーか？まあこんな質問何て【今は】構わ
ないが…

今使っているその魔力は主の^{マスター}付けている【指輪】のモノだ。

ある程度なら戦っても平気だろうな、どうもこの町は^{マナ}霊脈からの
魔力が溢れがちだしな。

もつとも、暴走すれば主を^{マスター}苦しめる事になるから、そこは承知し

ておけ。」

「……………」

「どうせ、聞いているだけだろうがな……さて、^{マスター}主の部屋は何処何
だか……………」

だが、そんな事をいちいち気にしている場合でもないので、あっさりとその場は流しておいた。

正直バーサーカーが自分に切りかかってきたら、魔力供給ラインを狭めてるのを止めるつもりだし、

そうなればバーサーカーの現界もすぐに解けるだろうと分かっていた。

別にバーサーカーの為に、自身の魔力供給を減らしている訳ではない、

ただ単に、^{マスター}主の駒は大いに越した事はないだろうという、随分と単純な理由だった。

魔力なんて、それこそ【自分】でなんとかすればいい、故にドラグーンは困って等いなかった。

さて、それではまた部屋探しに戻るか、とエントランスだと思われる場所の階段を上っていると…

「誰…?」

小さな、幼い少女が、そこにいた。

サイド 桜

数時間、桜は雁夜と話をした後、いつもは戻る部屋に戻らず、雁夜が戻ってくるのを待っていた。

蟲蔵に入ると、毎日雁夜が苦しそうな声をあげているのを桜は知っていたが、何も出来ないから、

ただ、黙って、何も考えず、時々こうして廊下に座って、待っていた。

どうして待っているのか、桜には分からない。

それでも、こうして待っていると、戻ってきた雁夜は、嬉しそうにしていた。

だから、【何故か】待っているのが良いような気がして、今日も桜はこうして待っていた。

いつもと違うことが起こったのは、その2時間程後の事だった。

桜が待っている階段の付近に、【誰か】がやってきたのだ。

「誰…？」

桜は、そう問いかけて少しだけ考えた。

（黒い人と、白い人……雁夜おじさんを何処に連れて行くんだろう？
おじ様の知り合いなのかな、それとも、お義父さんの知り合いな
のかな。）

あの人達と一緒になら、雁夜おじさんに酷い事でもするのかな……
桜にも、するのかな。）

初めて現れた二人の人間に、桜はすぐに目を伏せた。

この家の人間で、自分のような【いらぬ子】に優しくするような
【物好き】は、

白い人に背負われている雁夜以外に、桜は知らなかった。

驚くくらいに、その二人は違った。

黒い人は何だかよく見えなくて、冷たいような冷たくないような、
ただこちらを見ているだけだ。

白い人は蒼い眼に銀色の髪の毛だ、女の人なのか男の人なのか分か
らないけど、ただ笑っている。

もし、真つ当な人間ならば、その異様な真つ黒なフルアーマーの男と、
一人の人間を背負って笑っている青年の姿に、明らかな不信感を抱いていただろう。

だが【桜】には どちらの人も普通とは違うな、と分かったのだが、肝心の感情がなかった。

だからぼんやり見つめていた、雁夜がどうなるのだろうと、自分も何かされるのだろうと、
それぐらいの考えで、ただ特に思う事もなく、空っぽの瞳でその二人を凝視していた。

その様子に、明らかに笑顔を曇らせていく青年の様子に、気付かないまま。

(……何だ、コレは？こんな子供初めて見たぞ。)

ドラグーンは、目の前に現れた少女に、少しばかり戸惑っていた。

バーサーカーの方はというと、こちらも何かを感じているのか、先程までの殺気が微妙に薄れている。それだけ、二人のサーヴァントの前に現れた少女は、【異常】だった。

子供らしい表情等、何処にもない。濁っている眼は、その輝きを何処にやったのか、冷たいだけで。先程の声も、明らかに感情がなく、ただの確認の意志しか感じられなかった。

そうまるで、出来の良い【人形】でも見ているような

出しそうになった）
（
嫌な事を、思い

「っ」

ギリツ、とドラグーンは、思わず歯を喰いしばっていた。忘れておきたい事を、わざわざ思い返すのは止めておくに限るから。

「ねえ、雁夜おじさんを何処に連れてくの？」

ふと、聞き捨てならない声が、もう一度響いた。
今、この目の前の少女は、誰の名前を呼んだのか…？

「…主マスターの家族かな？御嬢さん。」

「…？…雁夜おじさんは、雁夜おじさんだよ？」

「…君は、雁夜おじさんの【お友達】かい？私達はおじさんのお友達でね、

さつき倒れてしまった彼を、今から部屋に運んであげるんだ…よ
かったら、お部屋が何処かおしえてくれないかな。」

念の為に確認するが、どうも話が通じない。

とりあえず、部屋だけ聞いて早く立ち去ろう、とドラグーンが、考え始めたその時

「そっか、雁夜おじさん、今日は早く【楽になれたんだね】
、良かった。」

そんな、言葉が、聞こえた。

「……今、何て言ったのかな？」

「え？」

「うん、今、何て言ったのか、教えてくれるかい…意味も込めて、な。」

スツ、と、いきなり目の前に現れたドラグーンに、少女が少し目を見開いた。

その様子を、【笑っていない】、静かな面持ちで見下ろすドラグーンの眼には、何の感情も宿ってはいなかった。

ただ、少女を、淡々とした眼で、見下ろしていた。

「?…だって、おじさんはいつも苦しそうにしてるから、今日はおじ様が、きつとすぐに気を失うのを許してくれたんだよね？」

「何故それが、【良かった】になる？」

「苦しくないよ？痛くないよ？何も見ないのが早いし、何も感じてなければそれが一番いいの、おじさんも桜も、それが【いつも通り】だから」

「…【桜】…」

ポツリ、と少女の名前を呟いて、ドラグーンは静かに目を伏せた。その様子に、少女は不思議そうに首を傾げる、何故この人はそんな事を聞くのだろうと、言いたげに。

だが、その行動がいけなかったのか、そもそも何がいけなかったのかは少女には分からない、次の瞬間、彼女はその首に手をかけられていたのだから。

そのまま、静かに締め上げられていく。

少しずつ、何の気持ちも込めていない眼で、自分の首を絞めるドラグーンを、同じように濁った眼で見つめた。

「……っ！」

「怖いかな？ 苦しいかな？ 本当に何も思わないかな？ それで【お前】はいんだな？」

「う、う……」

「生き人形の人生が好みか？ 腐った死体のような眼をして生きるのが【お前の幸せ】か？ ちび娘。」

そんな【お前の為に】、これから殺し合いに行く【おじさん】が、死んでしまつかもしれないのが、【良かった】事なんだな、【お前】には

「……っつ？ こほっ……」

一瞬、少女の表情に苦しさ以外の【何か】が過った。

それに気付くと、ドラグーンはあっさりとその手を放した。

その場にしゃがみ込み、少し咳き込む少女を、ただ先程と同じように見下ろすと、静かに言葉を紡いでいく。

「お前のおじさんは、お前の為にこの家に来たと、あの蟲爺から聞いた。

お前をこの家から出すのが、おじさんの【願い】だと、私達は聞いた。

それを叶える為に呼ばれたんだ、この主の願いを叶える為だ。^{マスター}

それを、【叶えてもらう側の人間】が、どうでもよさそうにぼん

やり見ているのは、どういうことだ？

お前はこの家から出たくないのか？ならそう言っ
てしまえ、此処にずっといるのが【楽だ】
と言うなら、構わない。

お前がいう【おじさん】の、私達の主の生マスタきている道筋を、食
潰すような真似だけはしないで
もらおうか、

そして、望み通り 一生この家で、その腐った心で死んで逝
け、言いたい事も言わないで、それが【好き】なら、な。」

そう一気に吐き捨てて、少女をどうでもよさそうに見下ろすドラグ
ーン。

言われた少女：【桜】は、ふと、その場に顔を伏せて、ピクリとも
動こうとしない、言われた言葉が響いているのか、いないのか、
それとも、やはり何も感じないのか、それを見ているドラグーンは、
おもむろに、肩に担いでいた【彼】を桜の前に横たえた。

「…かりや、おじさん…？」

「ああ、お前のおじさんだ、この家で一人だけの、【お前の味方】
だ。」

お前を助けたいと言って、お前を助ける為にこうなって、お前の
為に私達を呼んだ。

確かに【全部】がお前の為じゃない、きっと色々思ってる事もあ
るだろうが、それでも、やっぱりお前の為に 　　　　　この男は、
生きている。」

急に視界に入ってきた知った顔に、桜が小さく反応する。
その声に、ドラグーンはまるで、問いかけるように。

「感情を殺すのが悪い事とは言わない、それをしなければ生きられないなら、だが【生きているからこそ意味がある】ものもある。」

「お前は、本当にこのまま、『心』が死んでも構わないんだな？」
「…」

桜が手を伸ばす、その手は、躊躇いがちに雁夜に触れた。

その表情は未だ虚ろだが、微かに震えている視線が、その感情の欠片を示している。

「私：おじさん：でもおじい様が…」

「知るか、お前は『おじい様』が好きなのか？違っだろう、お前はあの蟲爺は対して大事じゃない。」

その胸の内を晒せ、本当に今のままでいいと感じていないなら、自分自身の考えで行動しろ、お前は【生きて】いるんだぞ。」

怒鳴りつけるのではなく、嘲笑うのでもなく、ただ静かに響く声は、桜の内に静かに降り積もっていく。

【それでいいのか】と【お前は満足か】と、否定するだけではなく肯定しながら、同時にただ問い掛けていた。

選ばせていた、【存続】か【前進】を、お前はどちらへ行きたいの
だ生きたいと。

「分からない、分からないよ…でも、でも…」
「でも？」

「……………おじさんの、傍にいたい……………」

その瞬間、桜はドラグーンに小脇に抱えあげられていた。

「…？」

「それならいい、【今は】それで納得しておく、それでこの話は終わりだ。」

ああ、それと、お前のおじさんの部屋は何処だ？とりあえず場所を教える。」

「え？えつとね、あつち。」

「そうか、分かった。」

同時に抱えあげていたのか、雁夜の事も肩に担ぎあげて、ドラグーンは桜の指差した方向に歩き出していた。

その急な展開にオロオロと戸惑いがちにドラグーンと、その隣にやってくるバーサーカーを見るが、二人とも何も言わないので黙ったおいた。

そして手が使えないからか、とりあえず部屋のドアを蹴りあけて中に入る。

そうして、そのまま。

「よし」

「…何で？」

二人纏めて、ベッドに押し込まれてしまった。

「とりあえず寝ろ、もう子供は寝ている時間だろう。」

「…此処はおじさんのベッドだよ？」

「良いだろう別に、お前はおじさんの傍に居たいんだろうが、

何の問題もない、ああそれと私達が寝ている間此処にいてやる。

誰にも邪魔はさせないから、気にせず眠ってしまえ。」

125

有無を言わさないその行動に、桜は数秒固まるが、もうどうでもよくなったのか、

そのまま雁夜に張り付くことにした。

（あったかい…）

ふと、胸の奥に、むずむずとした感覚が、した。

苦しいようで、でも嫌じゃない【何か】。

とても懐かしいようで、当たり前のようなソレを。

(なんだっけ…?)

その温もりにも、少しずつ意識を遠ざけながら、桜は雁夜と一緒に眠りについた。

『……………』

『おい、そんな殺気出すな、いいから霊体化するぞ?』

『……………』

『あのな、お前……ああもういい、まったく、どいつもこいつも、言いたい事は言わないと分からないんだよ』

『……………』

『……………心を殺すのが、【幸せ】な訳ないのにな、それが普通なんておかしいんだよ、

このちびも、お前も……………『私』、もな』

そんな会話が、聞こえたような気がしたけれど
のせいなんだろう。

きつと気

幕間 ～Cherryblossom～(後書き)

次回はアサシンを死んだと判断した陣営が動き出します。

暗躍が可能になったドラグーンと、雁夜おじさん&バーサーカーも行動を開始。

聖杯戦争、はじまります

次回、『戦争開戦』をお楽しみに・・・。

戦争開戦（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

皆様、明けましておめでとうございます。

今年も一年、出来る限り速めの更新を心がけますので、見守って頂ければ幸いです。

今回は雁夜おじさんとバーサーカーは出演しません。
その代わりに、他陣営が初登場します！

そして、始まりの戦いが幕を開ける……

1 / 3 追記

感想にて間違いを指摘して下さった方がいらっしやいました！
急いで修正しましたが、お手数をおかけしてしまい申し訳ございませんでした；

戦争開戦

<SIDE/セイバー>

一組の女性達が、街の中を歩いていた。

その二人が通り過ぎる度に、道行く人が振り返る。

一人は銀髪に赤い瞳の美女、人間離れしたその面持ちに関わらず、どこか幼い印象を与える女性。

もう一人は、黒いスーツを纏い銀髪の女性をエスコートするように一緒に歩いている。

一見すると、まるで青年に見える【彼女】もまた、金髪に翡翠の瞳と美しい面持ちをしている少女だった。

良くも悪くも彼女達は目を引いた、その存在だけで、周りが華やかになるような錯覚すら受ける程に。

だが…誰が知ろうか、彼女達こそこれから巻き起こる戦争の参加者【マスター】と【サーヴァント】なのだ。

更に言うなら、この戦争の勝利者の候補でもあり、アイツベルン始まりの三家とセイバー騎士王なのだ。

そんな彼女達は、今は街の中を散策していた。

理由は多くあるけれど、その中でも今、
セイバーが優先しているのは【アイリスフィールの護衛】。
ただ、それだけだった。

(…………アイリスフィール。)

自分を召喚したマスター^{切嗣}の妻。
アインツベルンのホムンクルス。
幼い少女の母親たる女性。

……………そんな彼女は、あの冬の城から、今の今まで一度も外へ
出た事が無いと言った。

それを、セイバーはどういう気持ちかは分からない。
でも、アイリスフィールのその気持ちは、叶っても良い筈だと感じ
た。

だから、今こうして、一緒に街を歩いている。

他のサーヴァントを誘き出す為、そう理由も付けられた。
実際ソレは事実だし、効率も良いのは理解出来る。

もしかしたら、今のマスター《切嗣》と上手くいってないからかも
しれない。

アイリスフィールだけが、セイバーと分かりあおうとしてくれたか

らかもしれない。

だがそれでも、セイバーは、今だけはアイリスフィールの事を優先したかった。

(しかし……何なのだろう、この感覚は)

だが、ふとセイバーの中に、何か引つかかるような感じがしていた。不快ではなく、ただ【気になる】といった感覚、まるでそう、何故か懐かしいといいたくなるような。

それでいて、何処か不安になるような、上手く言えないソレが、彼女の中に生まれていたのだ。

それは、アイリスフィールと話すより前、そう『冬木市』に入った時からしていたのだった。

「……………」

「どうしたの、セイバー？」

「いえ…アイリスフィール。」

この冬木に来てから、どうも違和感を感じているのですが…サーヴァントの気配ではないようです。

ただ、注意した方がいいかもしれません。」

「そうなの…でも、サーヴァントではないのね？」

「はい、ですが油断は禁物です、私でも分からない手段を用いてい

る可能性はありますから。」

しかし、今はそこまで気にしないでおこうとセイバーは判断する。正体が分からない以上、今は何も出来ないのだ、なら今はアイリスフィールの護衛に集中していよう。

敵ならば、自らの手で斬り伏せるまでであり、もしかしたらこれはまだ見ぬサーヴァントへの武者震いかもしれない。

そう、彼女は思ったのだ。

奇しくも、同じような感覚衝動に駆られている、【彼】の事を知らないが故に。

その後、セイバーとアイリスフィールは、敵であるサーヴァントの誘いにのり、倉庫街へと赴く。

それは数刻後の事なのだが、それを知らない彼女達は楽しんでいた。……それが『最初で最後の』安息の時になると知らずに。

(…… 何だか、【変な感じ】がするな。)

場所は変わって、間桐家の家の庭で、ドラグーンは首を傾げていた。特に理由もないのだが、妙な感覚衝動を覚えている為、とりあえず気を紛らわせようと間桐家の庭を歩いていた。

隣には、今は昼という事もあって爺の邪魔が入らないだろうと連れてきた【桜】がいる。
ドラグーンが少し、【時を】待っているのだという事を伝えてからは、

桜は出来る限り一緒に居ようとしていた。

それが信用からくるものなのか、それとも不安からくるものかは分からないが、大きな進歩だとドラグーンは感じている。

「どうしたの？何だか変な顔してるよ。」

「……いやなに、可笑しな感覚がするからな、しかも少し【厄介な方の衝動】だ。」

「？、痛いのか？」

「痛くはないな、ただ気分がふわつくとでも言うのか…懐かしいよ
うで、

腹立たしいような、そんな感じだな。」

「よく、分かんない…」

そんな会話に、桜は首を傾げて不思議そうな表情をするが、ドラグーンはその様子に少しだけ苦笑を浮かべるだけだった。

【雁夜の傍に居てほしい】、そう願った桜の事を、【彼】は多少は気に入っていた。

その言葉通りにさせて貰おうとドラグーンは考えているが、しかし状況は簡単なものではない。

魔力が十分に足らず、雁夜に必要な以上の行動を制限されている今、下手に動くのはどう考えても得策ではなく、

ドラグーンは【戦闘】に関しては、【現在】は自分よりも余裕のあるバーサーカーに、

雁夜の安全を任せようと考えていた。

（明らかに、あのバーサーカーは完全に狂っていなかった。

なら下手な暴走はそう簡単にはしないだろうな、多少の忠告は聞きいられている筈だ、

万が一にでもカリヤを死なせるような事はしないだろう。

しかし………何者だ、あの【英霊】^{バーサーカー}は？

私と同様に魔力の供給が十分ではない筈だが、そこらの英雄では【一筋縄で勝てる気がしない】んだが。）

それ以上に、ドラグーンはバーサーカーに疑問があった。

自分への【敵意】、それがどうも、単純なモノではないような気がしたのだ。

最初は確かに強く感じていた殺気は、実のところ、雁夜と会話をす

る度に弱くなっていた。

勿論完全に無くなった訳ではないのだが、【殺気が警戒に変わった】のに気付いた時には、

既に雁夜達は間桐家を出て行ってしまっていた。

（まるで、【私自身ではないモノ】に反応したようだったな。

そう、何かと錯覚でもしていたような……だが、【何】とだ？
バーサーカーは、【私と何を重ねて視ていた】。）

何故か気になる、下手に流してしまったらいけない事のように感じる。

そう、ソレは恐らくだが、この【感覚】
と関係しているような気すらしてしまうのだ。

（頼むから、何も起こってくれるなよ……）

それは、ドラグーンが【最初の目的を果たす】前の時間での事。

少しの疑問から生まれた不安は、その願いも虚しく的中する事になる。

数刻後に、引き起こされたソレに、【彼】は自分の過ちを知る事態へと陥る。

..... 『誰も』勝利する事の無い、「初陣」へと駆ける事となるのだった。

<SIDE / セイバー>

あの後、街を散策していたアイリスフィールとセイバーは、まるで挑発するか如く魔力を流しているサーヴァントを知り、あえてその挑発に乗る事にした。

そうして、辿り着いたのは人の気配のない倉庫街。

成程、此処ならば一般人の事も気にせず戦えるだろうと足を運んでいく。

その先に 一人のサーヴァントが立っていた。

セイバーはその姿を目にすると、冷静に相手を把握しようと思考を

巡らせる。

セイバーが捉えたのは、その眼差しだけで女性が籠絡されるのではないかと思う程に、
見目麗しい男だった。

しかしソレを上回るように目を引くのは、彼が手にしている【二本】の槍。

聖杯戦争の七つのクラス、その中で呼ばれる【槍】の英霊。

その手にする武器こそが証明、彼はランサーのサーヴァントだろう。

そのランサーは、右手に緩く握った長槍の穂を肩に預けているのは別に、

左手にもう一本、短い拵えの短槍を携えていた。

二本の槍にはいずれも刃先から柄まで【布】が巻かれていて、その実体を見る事は許されなかった。

(…槍を使うならば、通常は一つで良い筈。

しかしあのランサーは二槍……どちらかが本命の宝具ということだろうか?)

顔に出す事はなく、冷静に分析するセイバー。

だがそれを遮るように、低く明瞭な声が辺りに響いた。

「よくぞ来た。」

今日一日、この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつもこいつも穴熊を決め込む腰抜けばかり。

俺の誘いに応じた猛者は

お前、一人だけだ。」

静かな、それでいてほんの僅かな期待を込めた声でそう告げて、ランサーはセイバーへ問い掛けてくる。

「その清涼な闘気、【セイバー】とお見受けしたが、如何に。」

「その通りだ、そういうお前はランサーに相違ないな？」

「如何にも……これより死合戦あひおうという相手と、

尋常に名乗りを交わす事もままならぬとはな、興の乗らぬ縛りがあつたものだ……」

零れ落ちるランサーの言葉に、セイバーは少しだけ彼に好感を抱き、苦笑を浮かべる。

「是非もあるまい、もとより我ら自身の榮譽を競う戦いではないのだからな。」

貴殿とて、この時代の主のためにその槍を捧げたのであろう？」

「フツ……違いない」

これより戦いに臨もうとしているようには見えない程、軽くランサ

「は苦笑する。

その時、セイバーの後ろで控えていたアイリスフィールが僅かに息を詰まらせ眉を寄せた。

「……魅了^{チャーム}の魔術？夫のいる女に随分な行動を取るのね、槍兵^{ランサー}。」

っている。

ランサーは、女を魅了する魔力を放

アイリスフィールは、アインツベルンのホムンクルスとして魔術に特化していた体を持っていた故に、人間よりも遥かに高い対魔力で抵抗^{レジスト}した。

これが一般人は当然だが、並みの魔術師でも女である限り、ランサーの魅了^{チャーム}によって墮とされてしまうだろう。

それが分かるからこそ、少し怒りが込められるアイリスフィールの発言に、

ランサーは肩を竦めるだけだった。

「悪いが……【コレ】は持って生まれた呪いのようなものでな、こればかりは如何ともしがたい。

聖杯戦争で何ら役にも立たないこの力に、精々踊らされる事がな
いよう気を付けてくれ。」

…魅了チャームの代表格といえば、通常は『魔眼』なのだが…しかしランサーの魅了は

【相対し合う相手以外】にまで、発動した。

ということは眼ではなく【顔】に原因があるということだろうか？
それはまさに、魔眼ならぬ【魔貌】という事なのだろう。

「その結構な面構えで、よもや私の剣が鈍るものだと期待してはい
るまいな？ 槍兵ランサー。」

セイバーのクラスに与えられる、キャスターを除くクラスでは最高
ともいえる抗魔力のおかげで、

セイバー自身もまた、ランサーの魅了チャームを完全に無効化キャンセルする事が出来
ていた。

「そうならっていたら興奮めも甚だしいが…成程、セイバーの対魔力
は伊達ではない、か。」

結構だ、この顔のせいで腰の抜けた女
を斬るのでは、俺の面目に関わるからな。

…最初の一人が、骨のある奴で嬉しいぞ。」

「ほう、尋常な勝負を所望であったか 【誇り高い英

霊】と相見えられたのは、私にとっても幸いだ。」

そうしてランサーとセイバーは向かい合う。

互いの頬に浮かぶのは、望んだ好敵手を得た事による喜びの笑みだ。

相手が自分と同じような性質を持っていると気付いたが故に、

この二人の間にはもはや
あった。

言葉は、不要で

「それでは……………いざ、勝負！」
「っ……！」

その手にしていた二槍を、ランサーはまるで、鳥が羽ばたこうとするかのように大きく広げる。

そして今まで静かに湧き上がっていたランサーの闘気が、破裂寸前まで一気に膨れ上がった。

ソレを確認すると同時に、

セイバーは魔力で編まれた白銀と紺碧に輝く甲冑ドレスへと装いを変える。

そんなセイバーに、ランサーは怒涛の勢いで戦闘を開始したのであった

こうして舞台の幕は上がる。

これより始まるは魔術師と英霊の宴。

多くの命が失われ、多くの祈りを奪うモノ。

7人のマスターとサーヴァントの願いは叶うのか。

結末はどのようなものであれ、何も起こらない事は無い。

すでに、【采は投げられた】のだから。

戦争開戦（後書き）

とうとう始まりました聖杯戦争、セイバーVSランサーです。

小説やアニメを見ている人は知っているとは思いますが、ここでの戦いは余り変更は発生しないのでご安心くださいませ。

作者は基本、原作小説をもとに作成しておりますので、少し被る事が多いですが：少しでもオリジナル感を出せるようにルビを振りしていきます！

しかし、ドラグーン：【彼】の不安が的中した時、

その行動は大きく舞台を動かします、それは次回のさらに次回ですが：（笑）

それでは次回、『英霊混戦』を、お楽しみに！

英霊混戦（槍剣乱舞） （前書き）

前書き 注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。ご
ざいます。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

戦闘を開始したセイバーとランサー、その二人を見極める為に他のサーヴァントも動き出します・・・

英靈混戦（槍剣乱舞）

暗いくらい闇の中、本当に小さい声でその言葉は呟かれた。

「始まったか……」

薄暗い下水道

そこに、雁夜はいた。

間桐の家を出てから一日、彼は他のマスターに見付からないように、地下を移動していた。

何故そんな事をしているのか？

それは、下手に動き回って襲われては堪ったものではない、という理由と。

今の自分の体では、逃げ切れないという理由からだった。

雁夜は自分の肉体が余命一か月という事もあり、出来る限り敵に遭遇しないのを優先している。

だからこそ、今は情報を集めるのだ。

偵察に向けている蟲から、雁夜の右目に映し出されるのは二人の騎士の姿。

何としても勝利する、その為になら今はどれだけ無様だろうとこうして隠れている方が賢いのだ。

だが
もしも、あの【サーヴァント】がこの戦い
へ現れるならば…

「……その時は、お前に任せるからな、『バーサーカー』…」

【指輪】の嵌った右手を雁夜は握り締めた。

あのドラグーンに通常の戦闘なら支障は無いと云わしめたソレは、
確かにバーサーカーへ魔力を問題なく供給している。

そのおかげだろう、体の中の蟲共も、いつもよりはずっと大人しい
分、余裕をもって動く事が出来る。

「無理に戦う必要もない、けど、あの野郎に吠え面ぐらいはかかせ
てやれる…！」

そう言つて歪んだ笑みを浮かべる雁夜…だが、彼はちゃんと覚えて
いるのだろうか。

確かに支障は無いと言っていたけれど、それは【通常】に限られる
とも、言っていた事を。

何かに焦るように、冷静さを欠いている雁夜は気付いていなかった。
もしかしたら、それは間桐の家を出る前に言われた言葉のせいだっ
たのかもしれないが、
それでも、マスターとしてサーヴァントの状態を把握していないの
は、明らかに失態だった。

……傍にいるバーサーカーが、【何か】に反応している事を。
その気配が、何処か動揺するように揺れ動いていた事を、気付いて
いなかったのだから。

<SIDE/セイバー>

(よもや、これ程の戦士とは

！)

打ち合う事既に30を超え、辺りは騎士達の決闘により荒れ果て始
めていた。

地面は碎け、倉庫を破壊し、死闘を繰り広げているにも関わらず、
その実力は拮抗している。

セイバーは、かつて目の前の相手同様に、愛剣ではなく槍を携え戦
場を駆け回った事もあった。

そんな彼女の知る限り、『槍』は一つきりであり、両手で扱い敵を
貫き裂く武器として認識していた。

だからこそ、ランサーが『二本』の槍を携えて立ち上がった事を、
こちらを欺く策と考えていたのだが。

(この男…欺くどころか完全に使いこなしている！それも達人の域

と言っている程に！！）

打ち払う二槍は激しく自らの剣と打ち合っている、だが微塵のブレも隙もないそれは、明らかに目の前の敵が強敵なのだという事を告げていた。

その事実には、セイバーは驚きと共に喜びを感じずにはいられなかった。

まさか初陣にて、このような猛者と戦えるとはと、武者震いが体を駆け抜ける。

それは目の前のランサーも同じようで、彼もまたこちらを見つめ薄く笑みを零している。

「視えぬ剣とはな、なかなかどうして、楽にその首は取らせて貰えそうにないな。」

「その言葉、私には誉れだ……貴方こそ、素晴らしい腕だ、ランサー。」

その言葉を交わしながらも、二人の距離は縮まらない。

下手に動けば相手に切り伏せられると分かっているが故の距離。完全な拮抗状態において、互いの動きを読もうと視線を走らせ

『戯合いはそこまでだ、ランサー』

倉庫街に何処からともなく冷淡な声が響いた。

ランサーを呼んだ謎の声、それが彼のマスターである事をセイバーとアイリスフィールは悟る。

『そのセイバーは難敵だ、早々に排除しろ……宝具の開帳を、許す。』

姿を見せないランサーのマスターの言葉に、セイバーは一気に緊張を高めた。

今の今まで、恐らく正体を分からせない為であろうが、

呪符を巻きつけている二槍が、真の姿を見せようとしているのだ。

ならば、次に来るのは相手の【全力】、ここで気を抜けば即刻死に繋がる……！

「了解した、我が主よ……そういう訳でな、悪いが勝ちに行かせてもらうぞ、セイバー」

その瞬間、セイバーとアイリスフィールの眼に見えたのは朱色の美しい色彩、

槍に纏われていた布は失われ、ランサーのサーヴァントの【宝具】が、その姿を晒していた。

そのままランサーは深紅の槍を両手に構え、その槍は尋常ではない

魔力を放っている。

そして、その場に転がされている【もう一本の槍】に、セイバーは少し眉を寄せた。

（片方の槍を捨てた？…宝具の使用を許可された以上、やはりあの朱槍が真の宝具だということか…）

しかしこれ以上考えている余裕はセイバーにはなく、同様にランサーに愛剣を構える。

かの宝具が何であれ、使用される前に倒せば問題はあるまいと結論付けて。

そうして、再び二つの影は衝突した。

……………この戦いを……………闇より見つめる黒き暗殺者の姿がある事も知らずに。

「……………始まっているな。」

そこ、冬木教会の地下室にて、死闘が続く倉庫街を監視する者がいた。

冷たく静寂な地下室の中で、全神経を集中させ情報を整理している人間は、言峰綺礼といった。

眼を瞑り、激しい剣戟の火花が飛び交う様子を観察する。

それが出来るのは何故かといえば、彼の未だに現界している【アサシン】とパスを利用して、

アサシンが見ている光景をそのまま見詰めているのだ。

しかし、ここで疑問が生じる。

何故【アーチャーに倒された筈の、アサシンが生きている】のか？

「未遠川河口の倉庫街で、動きがありました……………いよいよ『最初』の戦闘が始まった様子です」

綺礼は卓上に載せられた真鍮製の朝顔が特徴的な古めかしい蓄音機へ向かって言葉を投げかける。

すると、一見独り言にも見えた彼の行動に対して蓄音機から反応があった。

『……………『最初』、という言い分はあるまい？公式には”第2戦”だ

よ、綺礼』

少しばかり歪んだ音質ではあるも、余裕のある洒落な声は、まぎれもなく遠坂時臣のものである。

一見蓄音機と見間違っこの装置だが、よく見るとその下にあるべき針とターnteーブルが無く、

代わりにあるのが、針金の弦によって支えられた大粒の宝石である。

遠坂家伝来の魔導器であり、遠坂の人間でなければ使い方も分からないこの通信機。

こうして【連絡を取り合っている】相手でもある綺礼の下にも、全く同じ装置が設けられていた。

そう

【聖杯戦争の敗北者】として、冬木教会に保護される【段取り】となっていた綺礼と、

密かに時臣が連絡を取る為に、わざわざ用意されたのだ。

そう、何故アサシンが生きていたのか？

それは、あの戦いがそもそも【茶番】だった、という事実があったのだ。

遠坂時臣と、言峰綺礼、そしてその父親たる言峰璃正がグルになつての茶番劇。

全ては遠坂時臣の勝利の為、彼の弟子でもあり、アサシンのマスターでもある言峰綺礼は、

聖杯戦争の監督役でもある父親に指示されたこともあり、最初から彼に協力していた。

本来なら、平等でなければならぬ聖杯戦争の監督役が、一人のマスターに加担する等以てのほかだ。

しかし現実として彼等はグルとなり、陰で言峰綺礼は遠坂時臣が有利に動けるように暗躍していた。

そうして、確かにその茶番は成功し、言峰綺礼は冬木教会（安全地帯）で己のサーヴァントを駆使し、完全に情報収集に回っていた。

「戦っているのはどうやらセイバー、それにランサーのようです。

とりわけセイバーはその能力値ステータスに恵まれています」

『成程、流石は最優のクラス、といったところか……マスターは視認できるか？』

「堂々と姿を現しているのは、一人だけ……セイバーの背後に控えている、銀髪の女です。」

状況的にを見て、セイバーに守られるように立っているのが彼女のマスターであろう、と綺礼は見当をつけた。

他にもマスターが潜んでいるかもしれないが、現状で視認出来るのは彼女だけであった。

『そうか、ランサーのマスターには身を隠すだけの知恵がある……この戦争の鉄則を弁えている。

だが待て、セイバーのマスターだが、【銀髪の女】だと？』

「はい、白人の若い女です……銀髪に赤い瞳、どうにも人間離れした風情に見えますが。」

だがどちらかというなら、【人形】が人間と変わらぬ動きをしていると言った方が正しいだろう。そう綺礼が考えていると、

『…アインツベルンのホムンクルス？』

またしても人形のマスターを铸造したのか……ありえぬ話ではないが、な』

「ではあの女がアインツベルンのマスターなのですか？」

『アインツベルンの翁が用意した戦争の駒は、』

衛宮切嗣だとばかり思っていたが……まさか見込みが外れるとはな』

その言葉に、言峰綺礼は内心で溜息を吐いた。

衛宮切嗣が出てくるのなら、きっと問い掛ける事が出来たであろう

【答え】を、

今度こそ知れたかった【答え】を、その手に出来るかもしれないチャンスが失われたからだ。

『とにかく、その女は聖杯戦争の趨勢を握る重要な鍵だ……綺礼、決して目を離すな。』

「了解しました……では常時、【一人を付けて】おきましょう。」

そう受け答え、綺礼は再び倉庫街で繰り広げられている、二人の英霊の激闘の監視を続ける。

己の本質を見極められず、今尚道を探し求める
求道者は、今はただ、先の見えない暗闇をさまよい続けている。

<SIDE/セイバー>

戦場は、一気にその様子を変えていた。

セイバーは自らの油断によって、完全に不利な状況へ追い込まれて
いた。

宝具として認識してた深紅の槍、それを手にした不可視の剣で打ち
払おうとしたのだが、

槍先が『インヒジブル・エア風王結界』に触れた瞬間、突然一陣の風が旋を巻いて吹き
荒れた。

それが原因で屈折角を利用した風の護りが破れ、一『約束された勝
利の剣』《エクスカリバー》を晒すことになったセイバーはランサー
に真名を看破される形となった。

その時、不意に轟いた雷鳴の響きによって、その空気が破られた。

『 つ!?!? 』

東南の方角の空へ共に振り返る。

彼等の瞳に映り込んだのは、激しく放電する紫電の輝きを夜空に散らしながら

ただまっすぐに彼等の間へ目掛けて駆けてくる、ソレは

「え……チャレオット戦車……?」

雷鳴を鳴り響かせながら空中を疾走する二頭の逞しくも美しい牡牛が牽いている戦車。

その二頭は蹄で虚空を蹴り、壮麗に飾られた戦車で神々しく上空を旋回し、

そうして速度を徐々に緩めていくと、対峙していたセイバーとランサーの間へ割り込む形で、

ゆっくりと地上へと降り立ってきたのだ。

そうして、同時に溢れんばかりの威光威風を背負った巨漢の男が現れたのだった………

英霊混戦（槍剣乱舞）（後書き）

今回は、少し長くなりそうですので、一度ここまでの事になりました。また近いうちに更新しますので、長い目で見守ってくださいませ。

m ——— m

ちなみに、前回と違いドラグーンは出ませんでした。

その代わりに色々とフラグを立ててる雁夜おじさんとバーサーカーが出ました！

そして活躍している他陣営・・・次回は征服王さんと英雄王さんが出撃！

更にバーサーカーの活躍をご期待くださいませ！

それでは次回、『英霊混戦（三騎来襲）』をお楽しみに・・・。

英霊混戦（三騎来襲）（前書き）

注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いです。ご了承ください。

それでも見てやろう！という心優しい方のみ、どうぞ閲覧してくださいませ。

乱入する英霊が続出！正直空気呼んで出てこようよ！と言いたくなる面々。

いざ戦おうという状態にもかかわらず置いてきぼりにされるセイバーとランサー！

このバトル、一体勝者はいたのだろうか・・・

英霊混戦（三騎来襲）

戦車から降りてきたのは、とにかく大きな男だった。

赤い髪に赤銅色の眼、何より鍛え上げられた体軀は周りの者を見るだけで圧倒する程であった。

「双方、武器を収めよ！王の御前である！！」

高らかに吼えた声は、彼が自ら乗っていた戦車の雷鳴に匹敵しかねない程に重かった。

その鋭く燃え盛るような威圧を湛えた眼は、氣迫だけで他者を屈服させかねない程である。

しかし、セイバーもランサーもその名を世に残す【英雄】だ。

大男に叫ばれた程度で、戦き平伏するような者ではなく、逆にその声に警戒を露わにする。

だが、この英霊サーヴァントが襲撃では無く、

セイバーとランサーの対決にただ乱入してきただけなのだ、

それ故に、その理由が分からなくなってしまう為、迂闊に動く事が出来なくなってしまう。

だが、その彼等の内心を気にする事無く、赤い髪の巨漢の御者は、躊躇う事無くこう叫んだのである。

「我が名は征服王イスカンドル！此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した！」

そうして、その倉庫街に集結していた全員が、思わず固まった

その場は、完全に困惑していた。

聖杯戦争の場において、まさか真名を自ら名乗るサーヴァントが現れる等、予想外にも程があつたからだ。

思わず目を見開き戸惑いを隠せないセイバーに、何ともいえない表情をするランサー、
彼等のマスターもまた、どういふつもりなのかとライダーと名乗つた大男に視線を向け

「何を、考えて、やがりますか！この馬ッ鹿はあああああああああああああ！！？？」

そいつは、御者台から現れた、黒髪の少年に、ぽかぽかと殴られていた。

「え？もしかして、彼がライダーのマスターなのかしら？」

突然の事に思わずアイリスフィールが口元に手を当てて呟くが、そう呼ばれたライダーのマスター

【ウェイバー・ベルベット】にはそんな事気にしている余裕もなかった。

そもそも彼は、本来此処に来るつもりなんて毛頭もなかったのだ。それをライダーに引き摺られるように、夜の冬木市を飛び回るように、戦車で連れまわされ。

高所恐怖症の気もちよつとあつたりするのに、冬木大橋の上に連れてかれたり等の苦労があつた。

そんな事やあんな事、そして今の発言もありで、ライダーに対する畏怖さえも忘れたウェイバーは、

とにかく戸惑いと怒りを込めた叫び声をあげて、征服王のマントに掴みかかったのだが……

びしっつー！！

……ライダーのデコピンによるが打撃音が静かに響き、その声はその場に沈んだのだった。
蹲るウェイバーと、己の指以外には何事もなかったかのように、ライダーは黙ったままのセイバーとランサーへ、おもむろに声をかける。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡りあわせだが、矛を交えるより先にまずは問うておくことがある。

うぬら各々が聖杯に何を期するのかは知らぬ……だが今一度考えてみよ。

その願望、その祈り、天地を喰らう大望に比しても尚、まだ重いモノであるのかどうかを、な」

その言葉に、セイバーは不穏なものを感じ取り、その瞳を細めライダーを睨みつける。

「貴様

何が、言いたい」

「うむ、噛み砕いて言うのだな」

ライダーはその問いに答えると同時に、両腕を突き上げ高らかに言い放つ。

「ひとつ我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はないか!？」

さすれば余は貴様等を朋友^{とも}として遇し、世界を制する快悦を共に

分かち合う所存である！」

』

.....

空気が、固まるを通り越して、溶けた。

言われた内容を理解するのを、殆どの者が拒む程に。

ソレは、余りにも、突拍子もない、あり得ない提案であった。

セイバーとランサーは、思わず呆れを含んだ眼差しを向け。

アイリスフィールとランサーのマスターは戸惑いを。

そして

今、この場を隠れて偵察している者達の

一人は、

「あんなのに世界は征服されかけたのか」、と溜息を零していた。

古代マケドニアの支配者、無双の戦士を束ねたと云われる、【征服王・イスカンドル】。

【世界征服】という野望の実現に、恐らく歴史上誰よりも迫った人物である。

しかし、だからといってこのような行動をするのは如何なものか…

戦っている者達の決闘へ乱入して、いきなり自らの真名を暴露した拳句、突然の恭順要請。

これでいったい誰が納得するというのか、そもそもソレを受け入れられると本気で思っているのか。

ハッキリ言つて、周りが呆れるのも戸惑うのも溜息吐くのも当然と言えば、当然だった。

「残念だが……その提案は承諾しかねる。」

苦笑まじりに肩を竦め、頭を横に振るランサー。

だがしかし、その双眸は一欠けらとて笑つていない。

鋭く、剣呑な雰囲気を漂わせ、ランサーはライダーを冷たく睨み据えていた。。

「俺がこの忠誠と武勲を捧げるのは、

今生にて誓いを交わした新たな主ただ一人だけ……断じて貴様ではないぞ、ライダー」

「そもそもそんな戯言を述べ立てる為に、

貴様は私とランサーの勝負を邪魔立てしたというのか……騎士として、許しがたい侮辱だ！」

そう言うランサーに続いて問いかけるセイバーの顔は、純粹な怒りに染まっていた。

生真面目な彼女にとっては、ライダーの提案そのものが不愉快きわまるものだったのである。

双方から怒りに満ちた敵意の視線を向けられ、

ライダーは少し困ったように、いかつい拳をぐりぐりと、自身の額に押しつける。

「待遇は、応相談だが？」
『くどい！！！』

ダメか？と申し出るライダーを、セイバーとランサーは声を揃えて拒絶した。
更に、セイバーは淡々としたまま続けて言葉を付け加える。

「重ねて言うなら、私もまた1人の王としてブリテン国を預かる身。いかな大王といえども、臣下に降るわけにはいかぬ！」
「ほう
【ブリテンの王】とな？」

その宣言によほど興味を惹かれたのか、ライダーは大仰に眉を上げた。

「こりゃ驚いた！名にしおう騎士王が、こんな小娘だったとは、なあ？」
「……………その小娘の一太刀を浴びてみるか？征服王」

低く押さえた声と共に、セイバーは剣の構えを取った。
その見えない剣と全身から湧き上がる戦意は、はっきりとした怒りを示している。

その様子ライダーは眉を顰めると、深く深く溜息を吐いた。

「あー……こりゃ交渉決裂かあ勿体ない、残念だのう……」
「ら、い、だあああ……………!!」

その時、ライダーの隣から恨めしそうな声が響く。

デコピンによる額の痛みと、今までの色んな状況にその場に蹲っていたウエイバーだった。

どうやら、痛みからは復活出来たようだが、それ以上に苦虫を噛み潰したような表情をしている。

「どくすんだよお？征服とか何とか言いながら、結局総スカンじゃないかよお……」

お前本気でセイバーとランサーを手下に出れると思ってたのか？」

そんな言葉を、ライダーは何ら悪びれた風もなく大声で笑って言い放つ。

「まあ、“ものは試し”と言うではないか！」

「『ものは試し』で真名バラしたンかいいいい!？」

無駄に情報渡したようなもんじゃないかああああ!!!!」

そのあんまりな答えに、

ウエイバーはライダーに、再びポカポカと両手で殴りつけながら叫び声をあげた。

それは何というか、周りの者からすれば、新手の漫才か同情を引く

ような光景でしかなく。
セイバーやランサーにアイリスフィールは、目の前の幼いマスターが気の毒にしか思えなかった。

と、その時

『そうか……よりもよって、貴様か』

低い、低い地を這うような怒りと憎悪を孕んだ声が響き渡った。

その声数名が反応する、ソレはセイバーとアイリスフィールには聞き覚えのある声。

そう、ランサーのマスターであった。

先程までずっと黙っていたにも関わらず、突然の負の感情を込めた声に戸惑いを隠せない。

ランサー自身も、己のマスターが何故不快なのかが分からないらしく、怪訝そうな表情をしている。

だがそれを気にする事も無く……いや、気にする余裕も無いのか、そのマスターは怨嗟を込めた言葉を投げつけていく。

『何を血迷って、私の用意した聖遺物を盗み出したのかと思ってみ

れば。

よりもよって、君自らが聖杯戦争に参加する腹だったとはねえ

.....

ウェイバー・ベルベット君？』

そして、そんな中で忌々しげに己の名を呼ばれて、

ウェイバーはやっとその【憎悪の矛先】が自分であると理解した。
のみならず、その声の主が一体【誰】なのかと、いう事も。

「あ.....!!」

そう、時計塔で講師を務めるあの男ならば、ウェイバーに聖遺物を盗まれたとしても、

ライダー以外の【他の英霊】の聖遺物を用意する事ぐらいは、出来て当然だったのだから。

故に、この冬木の地において、

【彼】がウェイバーの敵として現れる事になったとしても、何も不思議では無かったというのに。

『ああ残念だ、実に残念だなあ。

可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。

ウェイバー、君のような凡才は凡才なりに凡庸で

平和な人生を手に入れられた筈だったというのにねえ？』

ウェイバーは男を出し抜き、彼が呼び出そうとしていた英霊をサー

ヴァントとして従えた。

それは、時計塔で彼相手に受けてきた屈辱に対する、自分の出来る精一杯の仕返しだった。

そう、それで精一杯だったのに。

確かにウェイバーは、時計塔で過ごしてきた数年間の間、

彼を、【ケイネス・エルメロイ・アーチボルト】を、殺してやりた
いと思った事は何度もあったが、

……逆に、その【相手からの悪意】に晒されたのは、これが初めての
経験だったのだ。

声の主は、ウェイバーが恐怖に動けなくなっているのを理解すると、
いつそ穏やかとも取れる冷やかな声で、嘲笑いながら言うた。
た。

『致し方ないなあウェイバー君。』

君については、私が特別に課外授業を受け持つてあげようではな
いか……

魔術師同士が殺し合うという【本当の意味】、その恐怖と苦痛と
を、余すところなく教えてあげるよ

『光栄に思いたまえ』

事実、ウェイバーは恐怖に身を疎ませていた。

それほどまでに、何処からともなく浴びせられる、ケイネスの視線
は恐ろしかった。

自分がどれだけの事をしてしまったのか、

それによってこのような事態に陥った事も、魔術師が殺し合うという事の意味も。

どんな形であれ、やっとウェイバーは【理解する】事になったのだ。だからこそ

そんな恐怖に震えていた自分の肩を包み込む、その大きな掌の感触に、心の底から面食らった。

自分をマスターとして扱おうともしないライダーが、まるで自らを鼓舞するように笑みを浮かべていた事に。

「おう魔術師よ？察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だつたらしいな。」

ウェイバーの肩に手を置いたまま、

何処に潜むとも知れぬランサーのマスターへ向けてライダーは呼びかけると、

呆れたと言わんばかりの憫笑で顔を歪めた。

「だとしたら片腹痛いのう！

余のマスターたるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ、坊主のようにな。

姿を晒す度胸さえない貴様のような【臆病者】なぞ、役者不足も甚だしいわ！！」

『……………』

そう言つて、彼の王はハツキリと笑い飛ばした。イスカントル

くだらないと、馬鹿馬鹿しいと、お前の言葉なぞ意味はないと、

多少遠回しではあつたかもしれないが、【自らが主はウェイバーである】と彼は言ったのだ。

ならばそういう事なのだろう、イスカントルライダーにとって

ケイネスランサーのマスターの言葉など、それこそ【何の意味もない】のだ。

どれだけ彼がウェイバーに脅迫めいた言葉を投げつけたとしても、ウェイバーが恐れる程の魔術師だとしても、

イスカントルライダーからすれば、戦場にも出てこられない腰抜けと罵られてもしょうがない、

【つまらない男】でしかないのだから。

その否定の声に、言葉を失くしたただ憤怒の感情を込めるケイネスの事も気にする事もなく。

ライダーは誰にともなく夜空に向けて、大音声を張り上げた。

「おいこら！他にもおるだろうが？闇に紛れて覗き見をしておる連中は……！」

これには、その場の全員が怪訝な顔をし、困惑を露わにする。

「どづいことだ？ライダー」

問いかけるセイバーに向けて、ライダーは笑みを浮かべると言い放った。

「セイバー、それにランサーよ。」

うぬらの真っ向切つての競い合い、真に見事であった。

あれほどに清澄な剣戟を響かせておいて、

惹かれて出てきた英霊がよもや余一人という事はあるまいて。

余は知っておるぞ！ランサーの気配に導かれ集つてきた者共をな
！！」

そしてより一層、ライダーは辺り一面に轟き渡れとばかりに、大声で辺りに叫び続ける。

「情けない。情けないのう！冬木に集つた英雄豪傑共よ！

このセイバーとランサーが見せつけた気概に、何も感じるところがないと抜かすか？

誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するとうののなら、腰抜けだわな。

英霊が聞いて呆れるわなあ、んん！？」

一通り豪笑を放ち、ライダーは不敵に口元を歪め、最後にこう挑発の意思を込めて【宣告】を降す！

「聖杯に招かれし英霊は、今！ここに集うが
いい！！」

尚も顔見せを怖じるような臆病者は
征服王イスカ
ンダルの侮蔑を免れぬものと知れ！！！！」

ライダーの激しくも熱い糾弾の声は響き渡る、それは一切の驕りも許さない【王の言葉】。
明らかかな挑発だと知りながらも、目を伏せ耳を塞げばいいと分かりながらも、

【誇り】ある者ならば決して無視出来ない言葉だった。

故に、その場にその黄金は現れた

「我^{オレ}を差し置いて、【王】を称する不埒者が、一夜のうちに2匹も涌くとはな」

その黄金のサーヴァントは、不愉快げに口元を歪めると、
己の眼下に対峙する3人のサーヴァントを侮蔑も露わに睥睨した。

冷たい紅の瞳は、明らかに自ら以外の存在を否定すると共に貶めて

いる君臨者の【ソレ】だった。

自らこそが絶対であり、他に刃向う事すら許さない支配者の意思、早々に相手が頭を垂れるのが当然といわんばかりの態度。

何よりも

そのサーヴァント自身が言うように、

その男は【王気】と呼ばれるモノを感じさせていた。

その場のマスター達は、目の前に現れた黄金が、何者なのかに気付く。

そう、あれこそは昨日に行われた最初の戦闘の勝利者であるサーヴァント、

遠坂のマスターに呼び出されたであろう英霊。

この場に集いしサーヴァントから考えればすぐに分かる、あれは【アーチャー】、

聖杯戦争における【三騎士】に数えられる存在だと…

「そこまで言うんなら、まずは名乗りを上げたらどうだ？」

貴様も王たる者ならば、まさか己の威名を憚りはすまい？」

マスター達の動揺を気にする事無く、黄金のサーヴァントへ、ライダーがそう問い掛ける。

それは至極真つ当な意見であり、少なくとも誰であろうと問い掛ける事。

「問いを投げるか…雑種風情が、王たるこの我オレに向けて？」

だが、アーチャーの真紅の双眸は、益々怒りを帯びてライダーを睨

み据える。

どうやら、己の名を聞かれるのは、アーチャーには許しがたい行為だったようだ。

そうして、とうとうその英霊は殺意を剥き出しにすると、ライダーへ向かって冷たく言い放ってきた。

「我が拝謁の栄に浴してなお、この面貌を見知らぬと申すなら

そんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

アーチャーの左右の空間に、

陽炎のような揺らぎが広がり、その中から眩い刃の輝きが忽然と虚空に出現した。

美しく神々しい装飾に彩られ、湧き上がらんばかりの魔力が宿っている剣と槍。

明らかにそれは、【宝具】と判断されてしかるべき代物だった。

……………アサシンのサーヴァントを一方的に殺した、恐ろしく一方的な蹂躪。

今再び、それがこの場を持って再現されようとしていた

「アイツだ……！やっと現れた……！」

倉庫街の地下下水道、ずっとそこに隠れていた雁夜は声を荒げて顔を顰めた。

現れた黄金のサーヴァントは、間違いなく己の敵として存在する遠坂時臣のサーヴァントだ。

ならば、やる事は決まっている、その為に自分はこの場所にいたのだから……！

「バーサーカ………！」

声を上げる、胸に宿した激情のままに、ただあのサーヴァントを駆逐させるのだと命令すればいい。

そうすれば、あの男の苦しめる事が出来る、あわよくば、サーヴァントを失った奴を、

そのまま　ことだって出来るのだと、そう思って、命令を雁夜は叫ぼうとして……

き起こすのかを

ソレが、何を引

「……」

ふと

脳裏を哀しげな声が響いた気がした。

雁夜が感じたソレは一瞬の惑い、無視する事だって出来る、きっと空耳程度の言葉だった。

けど、何故か……無視してしまってもいいのだろうか、小さな疑問が湧いたのだ。

そう、桜の為にも、自分は死ぬ訳にはいかない。

だからこそ、今は他のサーヴァントの情報こそが必要なのだ、この戦いもアーチャーの宝具を知るのが目的……あわよくば、一太刀でもいれてやればいい！

「……………そうだ、焦る必要なんて、ないんだ。

今、此処でアレを倒せるなんて保証は無い、もっと冷静にならないと……」。

っバーサーカー！お前の実力を俺に見せてくれ！

無理に奴を殺す必要なんてない、ただ出来るならあのサーヴァントの情報を集めてこい！！」

自らの従えるサーヴァントへ向けて雁夜は叫ぶ、

その声に応じて黒き狂戦士は戦場へと向かっていった。

戦いへ挑みに行くバーサーカーへ、雁夜は意識を向けて目を伏せる。自らもまた使役する蟲を使って、遠坂時臣のサーヴァントを探る為に、戦場へ視界を飛ばす。

彼等の初陣は、こうして此处に幕を開けた。

突如として沸き起こったその魔力に、その場の全員が目線に向けた。

その先に
夜の色を集めたような、闇色の黒騎士が、立っていた。

全身をフルプレートの鎧で固め、ただ兜から見える赤く染まった異常な光。
何よりも禍々しいまでに発せられるその魔力は、明らかにサーヴァントだろう。

そしてそれ故に分かるのだ……あれは、身も心も狂っている、
狂戦士のサーヴァントだと。

全身から漂う負の波動は、明らかに他のサーヴァントとは比較にもならない。

そう……まるで、殺意が形を成して現れれば、あのような姿になるのではないかと思うほどに。

「……なあ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

そう声をかけるランサーだが、その目は決して笑ってない。

むしろこれまでで最大の警戒を、バーサーカーに対して向けている。

「誘おうにもなあ……ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだなあ」

先程までに比べて明らかに積極性に欠ける発言だが、全員がライダーと同意見だった。

……そもそも言葉は通じまい、狂気に犯されている存在に、果たして言葉を解する事が出来るのか？

その時点で会話など無意味でしかないのだから。

「で、坊主よ。サーヴァントとしてはどの程度のモンだ？あれは「……判らない、まるつきり【判らない】」

「なんだあ？貴様とてマスターの端くれであろうが。」

得手だの不得手だの、色々と『見える』ものなんだろうが？」

「だから！【見えない】んだよ！あのサーヴァントはどういうことか分からないけど、」

ソレが見えないし分からないんだ!!」

そう叫ぶウェイバーと同様に、隠れてそのサーヴァントを伺うマスター達も戸惑いを隠せないでいた。

その通り、バーサーカーのステータスが見えない為である。

まるで霧のように陰っているその姿は、他の存在から自らを隠匿するかのようなモノ。

……彼等は知らないが、【ソレ】が、バーサーカーの【宝具】なのだ。

相手に己の情報を知られない、これがその【宝具】の強みでもあり利点。

マスターの『視る』力すら防げているのもコレのおかげであった。

突如登場したこの異様な狂戦士バーサーカーに全員が警戒を緩めないが、バーサーカーはそれを気にする事無く、ただ一点を見ていた。そう、たった【1人だけ】にしか、彼は用は無いのだから。

「誰の許しを得て我オレを見ておる？この狂犬めが……」

その視線の先にいるのはアーチャー、黄金の王の姿である。

そんなアーチャーからすれば、薄汚い狂犬が自分を不快な視線で見ている等、決して許せぬ侮辱であった。

「せめて散り様で我オレを興オシじさせよ、雑種！」

その宣言と共に、アーチャーの左右に浮かんでいた剣と槍の切っ先が、ライダーからバーサーカーに向けられると、剣と槍は猛烈な速度で射出された。

その狙いは弓兵とは思えないほど大雑把だが、何せ2本とも宝具である。

それらは着弾と同時に、その場所を爆発させる程の破壊を齎した。

あんなものを食らって、ただで済む筈がないと数名が息を呑む。

そして巻き上げられた粉塵が薄れていくと

その人影は、あった。

その手には打ち出された筈の剣が握られ、僅かに逸れた足元には槍が作ったクレーターが出来上がっている。

揺らがない視線はしっかりとアーチャーへ向けられ、黒い狂戦士は今だ健在であった。

「……奴め、本当にバーサーカーか？」

「狂化して理性を無くしてるにしては、えらく芸達者な奴よのう」

「え……？」

「分からぬか、坊主。」

あのサーヴァントはな、先の攻防でまず第一射の剣を【手で掴み】

続けて飛来する槍を、その剣で打ち払ったのだ。」

ランサーとライダーが唸るが無理もない。
神速で飛来する宝具を掴み取り、それを即座に使いこなして間髪い
れずに迎撃に使用する等、
とても狂戦士バースカーのクラスとは思えない。

だが、宝具を打ち出した当のアーチャーは、顔を怒りに染めていた。
自身の宝具を奪い取り、今もなお立っているバースカーの姿に憤
怒を浮かばせている。

「その汚らわしい手で、我オレの宝物に触れるとは……そこまで死に急
ぐか、狗っ！」

怒号と共に再びアーチャーの周りに宝具の群れが現れる。
その数はざっと見て16…数多の剣に槍に鉾等、それら全てが紛れ
もない【宝具】だった。

「そんな……！馬鹿な!？」

思わず声を漏らしたウェイバーだったが、アイリスフィール達も内
心は同じである。

本来宝具は1人の英霊に一つか二つ、多くても三つか四つが限度だ。
切り札とも言える宝具をあれだけ所有し、それを未練もなく放つて
いく等異常としか思えない。

「その小癩な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎ切れるか

さあ、見せてみよ!!!」

その瞬間、それぞれが膨大な神秘を有する宝具の大群が怒涛の如くバーサーカーへ殺到していく。

一発一発が絶大の威力を持つ宝具の嵐が、倉庫街一帯を壊滅させていくのだ。

だが…その一切の容赦の無い爆撃の中で、バーサーカーは倒れなかった。

バーサーカーは、最初と同様に飛来した矛を左手で掴み取ると、たった今奪い取った武器を、まるで自分の体の一部のように使いこなし、

右手の剣と合わせて襲い来る宝具の一斉射撃を片っ端から撃ち落とすしていく。

「どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いヤツとの相性は最悪だな」

言葉すらなくし、ただその激戦を見続ける者達の中で、ライダーだけが顎に手を当て冷静に呟いた。

「黒いのは武器を拾えば拾うだけ強くなる。

金色も、ああも節操なく投げまくってでは深みに嵌る一方だろ

うに、融通の利かぬ奴よのう」

ライダーの指摘の通り、バーサーカーはアーチャーの宝具の猛攻を前にして一步も譲らない。

それどころか、より強力な宝具が飛来する度に、手元の武器を放り捨てて新たな得物を掴み取り、すかさず持ち替えて宝具を迎撃していくのだ。

そして、手元に偶然残った2本の宝具を、

おもむろにバーサーカーは掲げると、アーチャー目掛けて両方とも投げ放った。

投擲の狙いは曖昧だったのか、投げられた斧と曲刀とが命中したのは、

アーチャーの足場になっていた街灯のポールであり、その鉄柱を軽々と切断してみせる。

一方でアーチャーは鉄柱が寸断されるより先に身を翻し、何事もなかったかのように地表に着地を決めていた。

しかし、その顔には先程以上の憤怒が浮かんでいる。

「この、痴れ者が……！天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ！」

その凄まじい怒号と共に、アーチャーの後ろの空間が、今まで以上に大きく歪み始める。

「その不敬は万死に値する！そこな雑種よ、もはや肉片一つ残さぬぞ！……！！！！！！」

そして現れた宝具の数は32以上……先程の倍以上の数だ。

最早手加減する気は完全に失せ、紅蓮に燃える双眸がバーサーカーに向けられる。

宝具の連射を凌いでのけたバーサーカーではあったが、

まさかそれに倍する攻撃が繰り出されようとは思ってはいなかっただろう。

次に起こるだろう事態へ、全員が息を呑むが、不意にアーチャーの視線が大きく外れ、

【町の方角】へ向けられた。

「貴様如きの諫言で、王たる我の怒りを鎮めると？大きく出たな時臣……！！」

アーチャーが忌々しそうに舌打ちすると、辺り一帯に散らばっていた宝具も含め、

新たに打ち出されようとしていた宝具がまとめて消失する。

恐らく、自らのマスターに呼び戻されたのだろう。

「命拾いをしたな……狂犬」

既に殺意も失せたようだが、アーチャーはその傲岸さを隠さずに、他のサーヴァント達を見据える。

「雑種共！次までに有象無象を間引いておけ。」

我と、^{オレ}見まみえるのは【真の英雄】のみで良い。」

そう言い放つと、金色の粒子と共に、アーチャーは霊体化して引き上げていった。

「どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほど剛毅な夕チではなかったようだな」

苦笑するライダーだが、事態は好転していない。

アーチャーは去っても、今だ脅威となりえるバーサーカーはこの場に健在なのだ。

バーサーカーは暫くアーチャーの消えた場所を見つめていたが、完全になくなったと感じたのか、

そのままライダー達に背を向けようと踵を返そうとした………が、

【何か】を感じたのか、バーサーカーが視線を向ける。

その先には

セイバーの姿が、あった。

「……………つつ！！？？」

その瞬間、セイバーの背筋へ、凄まじい悪寒が奔り抜ける。
それは本能的なモノ、明らかな敵意と憎悪の視線に、一瞬にして危機感を覚えたのだ。

「……………r r ……！」

ぞっ、とする程の怨嗟の声、被っている兜の間から見える赤い狂気の光が、彼女を睥睨している。

「……………a e ……！！！！！」

バーサーカーが駆ける。
その身に狂気を纏わせて、今まで以上の憎悪を叫びながら、ただ全力で疾走してくる。
そしてその疾走の先にいるのは、ただ1人。

「アイリスフィール！下がって……………！！」

己の主を守ろうと、剣を構えたセイバー、その人であった

英霊混戦（三騎来襲）（後書き）

リアルが忙しい為、少し更新が遅れがちになってしまいました。出来れば3日に一回更新できるように頑張りたいです。

とうとう最初の暴走が引き起こされてしまったバーサーカー。そして雁夜おじさんのピンチに、ついにドラグーンが動きます。暴走するバーサーカーをどうやって止めるのか、その行動にご期待ください。

次回をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6086z/>

たとえ、世界を滅ぼしても ~第4次聖杯戦争物語~

2012年1月12日02時51分発行